箱崎38

―箱崎遺跡第59次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1048集

2009

福岡市教育委員会

箱崎38　正誤表

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1048集

頁	行	誤	正
20	3～4	127・128はSP47の土師器。127は小皿で	127・128はSP47出土。127は土師器の小皿で
21	2	135～137は白磁。	135・136は白磁。
28	Ph. 22	SK40(北西から)	SK40(北から)

NO. 68005

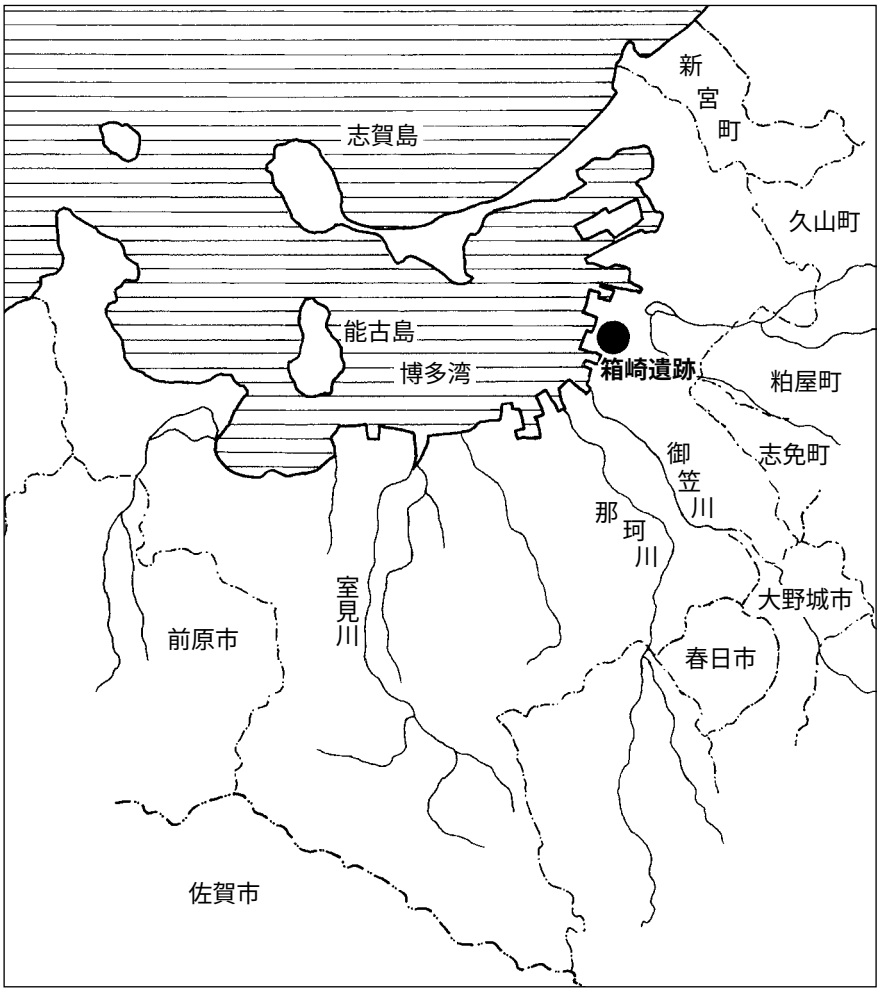
HAKO ZAKI

箱崎38

―箱崎遺跡第59次調査報告―

（はこざきいせき）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1048集



遺跡略号　HKZ-59
調査番号　0749

2009

福岡市教育委員会

序

海に開かれたアジアの交流拠点都市づくりを目指す福岡市は、大陸文化の受入口として古来より繁栄して来ました。その証拠を示す貴重な文化遺産が市内には数多く残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私たちの責務であります。

箱崎地区は筥崎宮の門前町として、古くから栄えてきた地域ですが、近年、箱崎地区では再開発事業や民間の開発が急激に進んで来ています。本市教育委員会では、それらの開発については、事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世に伝えるよう努めています。

本書は、共同住宅建設に先立って平成19年度に実施した、箱崎遺跡第59次調査の成果を報告するものです。調査では中世の集落跡や墓を検出しました。墓の中からは中国産輸入陶磁器などが出土し、箱崎地区の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、申請者をはじめとして、関係各位のご協力に対して、厚く感謝の意を表します。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　山 田　　裕 嗣

凡　例

⑴　本書は、福岡市教育委員会が平成19（2007）年度に福岡市東区箱崎3丁目2412-1で調査を実施した発掘調査報告書である。

⑵　発掘調査は上記の主体により行われ、山崎龍雄が担当した。

⑶　遺構・遺物の実測は山崎が行った。

⑷　本書に使用した図面の浄書は山崎が行った。

⑸　調査で出土した中世輸入陶磁器の分類については、太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡 XV－陶磁器分類編－』（2000年）、中世土師器については山本信夫「統計上の土器－歴史時代土師器の編年研究によせて－」『乙益重隆先生古希記念論文集』（1990年）、近世陶磁器については九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年－九州陶磁学会10周年記念－』（2000年）を参考にした。中国産陶磁器の判定については埋蔵文化財課調査員の田中克子氏の協力を得た。

⑹　調査で出土した貝類の分類については本市文化財部専門調査員の山崎純男氏に依頼した。

⑺　遺構・遺物の撮影は山崎が行った。

⑻　本書に使用した方位は磁北であり、真北とは6°30′西偏する。

⑼　土層・遺物の色調の記録については新版標準土色帖を使用した。

⑽　調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。

⑾　本書の執筆・編集は山崎が行った。

本 文 目 次

第１章　はじめに …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の組織 …… 1
第２章　遺跡の立地と歴史的環境 …… 3
第３章　調査の記録 …… 3
　1　調査の概要 …… 3
　2　遺構と遺物 …… 3
　　①建物 …… 3
　　②溝状遺構 …… 5
　　③土坑 …… 7
　　④ピット出土遺物 …… 19
　　⑤遺構面・その他の遺構出土遺物 …… 21
　3　まとめ …… 21
　4　付論　箱崎遺跡第59次調査区出土の貝類について …… 22

挿 図 目 次

Fig.1　箱崎遺跡と周辺の遺跡（1/50,000）…… 2
Fig.2　箱崎第59次調査地点位置図（1/5,000）…… 2
Fig.3　調査区遺構全体図（1/120）…… 4
Fig.4　SB45（1/80）…… 5
Fig.5　SD04・10・南側西壁土層（1/50・1/60）…… 5
Fig.6　SD04・10・28出土遺物（1/3・1/2）…… 6
Fig.7　SK06～08・11・14・15・20・21（1/40・1/50）…… 8
Fig.8　SK06・07出土遺物（1/3・1/4）…… 9
Fig.9　SK07出土遺物（1/6）…… 10
Fig.10　SK08・11・14・15・20・21出土遺物（1/3・1/2）…… 11
Fig.11　SK23・30・33・40（1/30）…… 13
Fig.12　SK23・25・26・27・30出土遺物（1/3）…… 14
Fig.13　SK38（1/40）…… 15
Fig.14　SK30・33・38出土遺物（1/3・1/2）…… 16
Fig.15　SK40出土遺物（1/3）…… 17
Fig.16　ピット出土遺物（1/3・1/2・1/4）…… 18
Fig.17　攪乱・遺構面出土遺物（1/3）…… 19
Fig.18　各遺構出土鉄製品・銅銭（1/2・1/1）…… 20

写 真 目 次

Ph.1　調査区周辺の状況（南から九大方面を臨む）… 23
Ph.2　調査区南側（東から）…… 24
Ph.3　調査区中央部（東から）…… 24
Ph.4　調査区北側（東から）…… 24
Ph.5　SB45建物（東から）…… 25
Ph.6　建物西壁土層の状況（東から）…… 25
Ph.7　SD04（南西から）…… 25
Ph.8　SD10完掘状況（東から）…… 25
Ph.9　SK07（西から）…… 26
Ph.10　SK07底面の状況 …… 26
Ph.11　SK06（北西から）…… 26
Ph.12　SK14（北東から）…… 26
Ph.13　SK20（西から）…… 26
Ph.14　SK21（西から）…… 26
Ph.15　SK23・33検出状況（東から）…… 27
Ph.16　SK23（西から）…… 27
Ph.17　SK23遺物出土状況 …… 27
Ph.18　SK33（東から）…… 27
Ph.19　SK33遺物出土状況（東から）…… 27
Ph.20　SK30（北西から）…… 28
Ph.21　SK38（南西から）…… 28
Ph.22　SK40（北西から）…… 28
Ph.23　SK40遺物出土状況 …… 28
Ph.24　第2面遺物出土状況 …… 28
Ph.25　SK33出土貨泉 …… 28
Ph.26　各遺構出土遺物 …… 29

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

平成19（2007）年8月7日に宮下哲典氏より、福岡市東区箱崎3丁目2412-1番における共同住宅建設の為の埋蔵文化財事前審査願い（事前審査番号19－2－361）が福岡市教育委員会に提出された。申請地は箱崎遺跡の遺跡範囲北側に立地するため、平成19年8月23日に確認調査を実施して遺跡の有無を確認した。確認調査の結果、遺跡の存在が確認できたため、申請者側とその保存について協議を行ったが、計画の変更は困難であるということから、記録保存のための調査を行う事となった。申請者は個人で、かつ建設予定建物の中に一部自宅も含んでいたため、発掘調査費用の一部に国庫補助金を適用して調査を行う事となった。調査対象範囲は工事計画が申請地のほぼ全面に亘るので、全域を対象として調査を行った。本調査は平成19年11月5日から開始し、12月15日迄行った。調査実施面積は申請面積252.81㎡中の156.4㎡である。調査報告書作成作業は平成20年度に実施した。

調査にあたっては、申請者の宮石哲典氏及び工事担当の株式会社只松建設の方々に多大な協力を受けた。記して感謝の意を表する次第である。

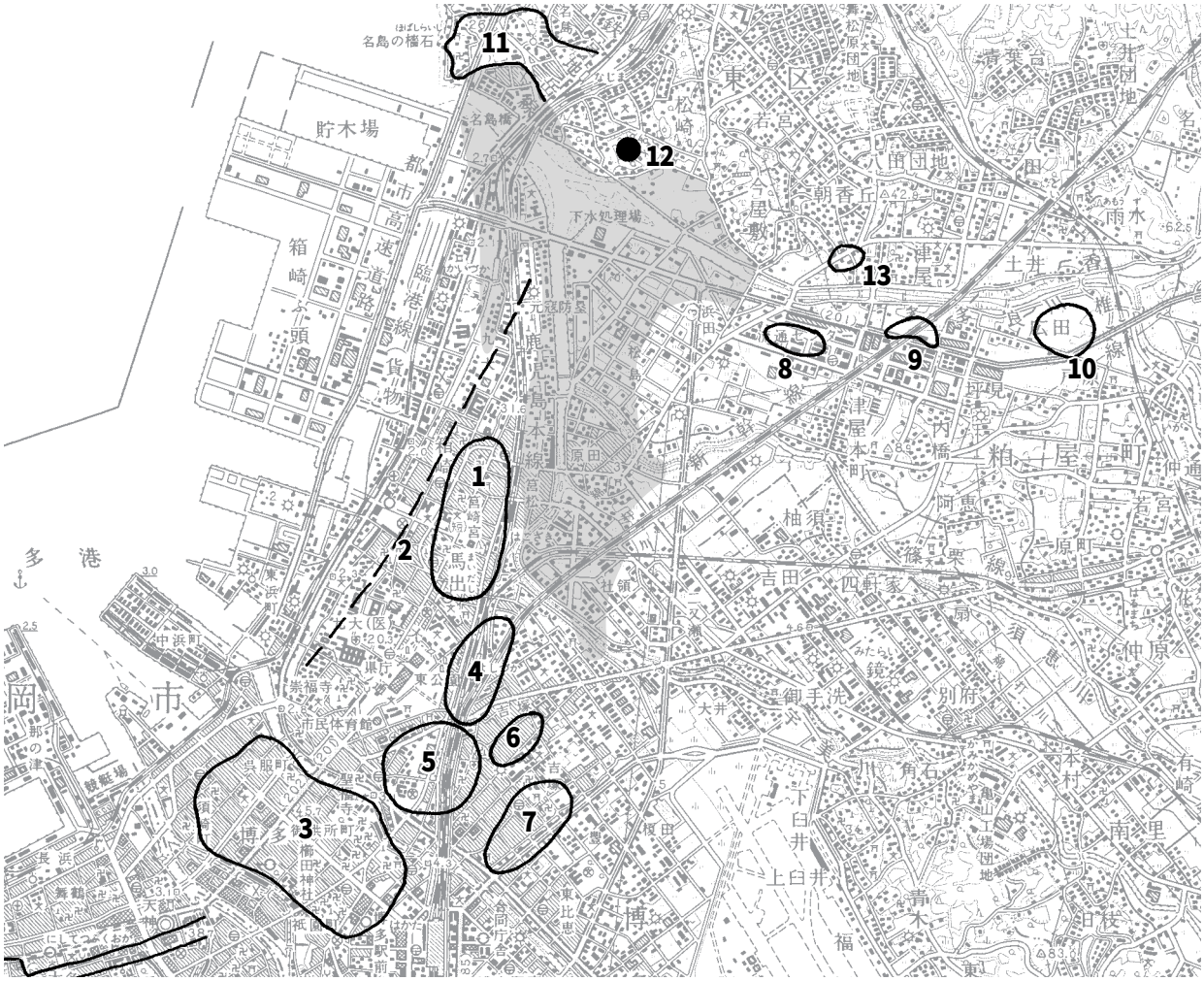
２．調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。

調査委託　宮石　哲典
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　文化財部埋蔵文化財第2課長　力武　卓治（前任）　田中　寿夫（現任）
埋蔵文化財第2課調査第1係長　杉山　富雄
事務担当　文化財管理課管理係　鈴木　由喜（前任）　古賀とも子（現任）
調査担当　埋蔵文化財第2課主任文化財主事　山崎　龍雄
調査作業　阿部孝行　坂口壽美子　真田弘二　近藤澄江　土橋一則　徳永洋二郎　中村秀策
牟田邦博　村田敬子　山下智子　山下直美　吉田哲夫
整理作業　村上信子

箱崎遺跡第59次調査の概要

遺跡略号	調査番号	調査地番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当	分布地図番号
HKZ-59	0749	福岡市東区箱崎3丁目2412-1	252.81㎡	156.4㎡	一部専用住宅兼共同住宅	2007.11.05～12.15	山崎龍雄	箱崎34



1. 箱崎遺跡　2. 元寇防塁　3. 博多遺跡群　4. 吉塚本町遺跡　5. 堅粕遺跡
6. 吉塚祝町遺跡　7. 吉塚遺跡　8. 多々良遺跡　9. 多々良込田遺跡　10. 戸原麦尾遺跡
11. 名島城跡　12. 名島古墳（消滅）　13. 顕孝寺跡　※スミアミは中世内湾海岸線

Fig.1　箱崎遺跡と周辺の遺跡（1/50,000）

Fig.2　箱崎第59次調査地点位置図（1/5,000）

第２章　遺跡の立地と歴史的環境（Fig.１・２、Ph.１）

箱崎遺跡は博多湾沿いに連なる古砂丘上に立地する、弥生時代終末から現在に至る複合遺跡である。箱崎遺跡のある箱崎地区は、延長元年（923）飯塚市筑穂にあった大分宮（だいぶぐう）から遷座創建された筥崎八幡宮を中心に発展した門前町であり、中世は博多と同じように対外交易の拠点として栄えていた。箱崎遺跡周辺の弥生時代から古代にかけての遺跡としては、箱崎から南に続く古砂丘上に博多遺跡群や吉塚遺跡、堅粕遺跡があり、多々良川を遡った内陸低地部には、古代の官衙的大型建物群が出土した多々良込田遺跡などがある。また多々良川対岸の名島地区には古墳前期の前方後円墳の名島古墳があった。中世になると多々良川流域には戸原麦尾遺跡、多々良遺跡や、大友氏に縁のある顕孝寺跡などがある。また筥崎宮一帯は文永の役（1274年）以降、元軍の再襲来を防ぐための元寇防塁が海岸砂丘線上に薩摩国によって築かれ、建武2年（1335）には、南北朝時代の始まりとなった足利尊氏・少弐氏と菊池氏が戦った多々良浜合戦もこの周辺で行われた。また箱崎周辺には米一丸地蔵堂や勝軍地蔵堂など、多くの板碑が存在する。戦国時代になると多々良川河口対岸の名島には、立花城の出城として名島城が築かれた。名島城は豊臣秀吉の九州平定後には、筑前国の国主となった小早川氏の本城として近世城郭に改修され、慶長5年（1600）の関ヶ原合戦の軍功によって黒田氏が筑前国主となり、新たに福岡城を築城し移るまで継続している。箱崎遺跡の調査は地下鉄2号線の建設に伴って始まり、その後箱崎地区の再開発に伴って調査が多く行われており、現在その調査次数は63次を数える。この急激に進む都市開発によって、落ち着きのあった箱崎の町並みが急速に失われてきている。

第３章　調査の記録

１．調査の概要（Fig.3、Ph.2～4）

本調査区は箱崎遺跡の北側に位置する。両側を道路で挟まれた南北に細長い敷地で、南側は道路建設に伴って調査が行われた第10次調査区に隣接する。調査は廃土が場内処理の関係から調査区を3分割して行った。調査はまず調査区中央部から開始し、その後南半分を行い、最後に北側を行った。遺構面は地表下0.8～0.9mで検出した。遺構面までの層序は比較的層序の乱れが少ない西壁南側によれば、砕石などを含む表土、炭化物・焼土を含む旧表土、黒褐色土、遺構面の明黄褐色砂となる。所々焼土と漆喰を含む大型土坑があり、再開発以前の古い建物の解体時に出た廃棄物を焼却処分し、埋立てた穴であろうか。その部分では周りの土壌も熱を受け赤く変化していた。調査は遺構面で遺構を検出した後、更に0.3～0.4mほど下の鈍い黄色粗砂まで掘り下げ、下部遺構を確認した。下部ではピットや溝状の落込みなどを少量確認したが、面的にはまとまりを得なかった。検出遺構は木棺墓2基、土壙墓1基、土坑7基、溝4条、礎石・根石を持つ建物1棟、柱穴・ピットなどである。遺構の時期は中世前期～近世にかけてであり、出土遺物もその時期のものである。また遺構面からは古代の須恵器などが少量出土した。

２．遺構と遺物

①　建物（SB）

SB45（Fig.4、Ph.5・6）　調査区北側で検出した、東西三列の扁平な礎石もしくは根石を持つ柱穴群。南側2列はSD04に切られる。主軸はN－59°－Wに取り、SD04とほぼ直交する。各列の柱穴・礎石から

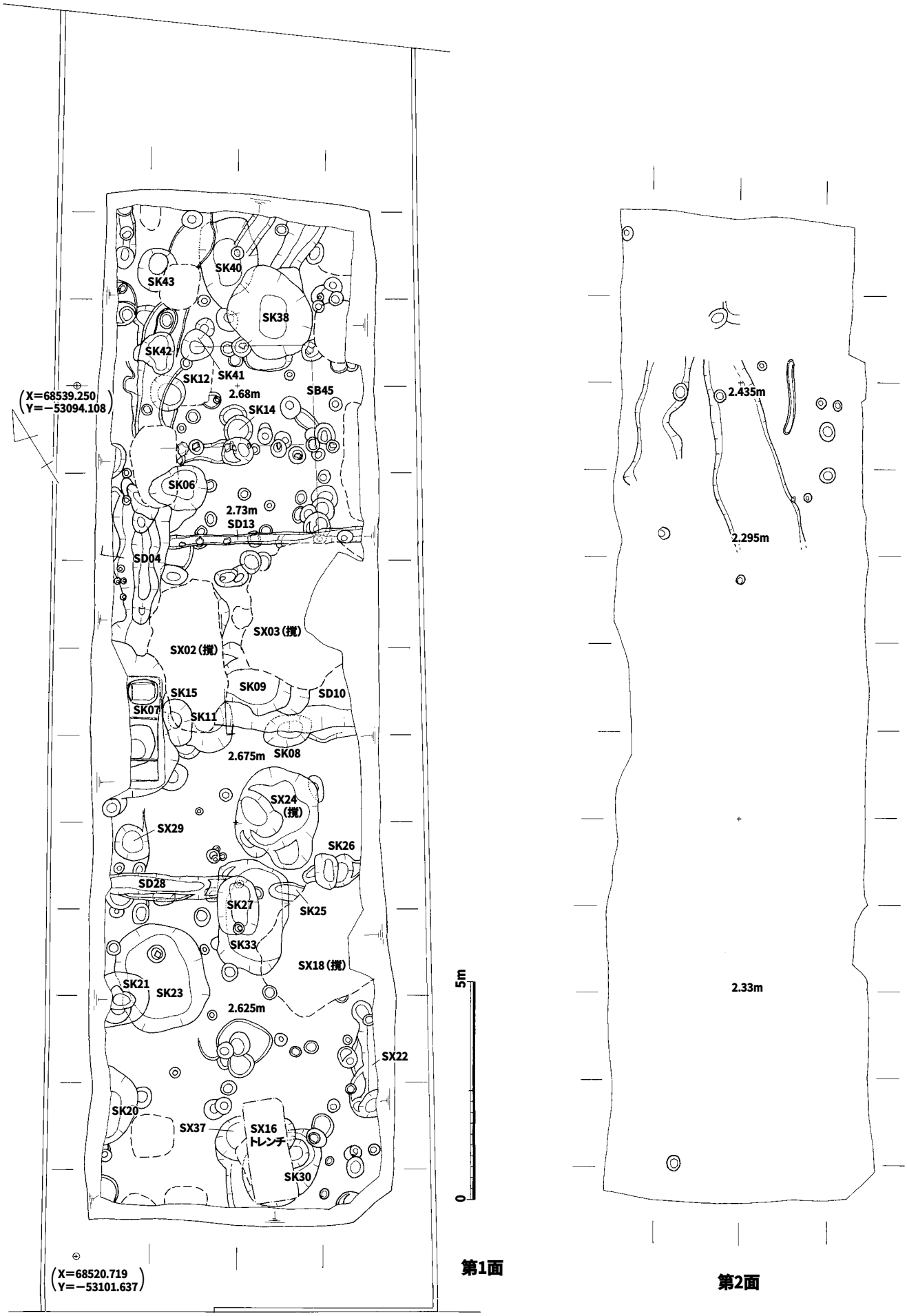


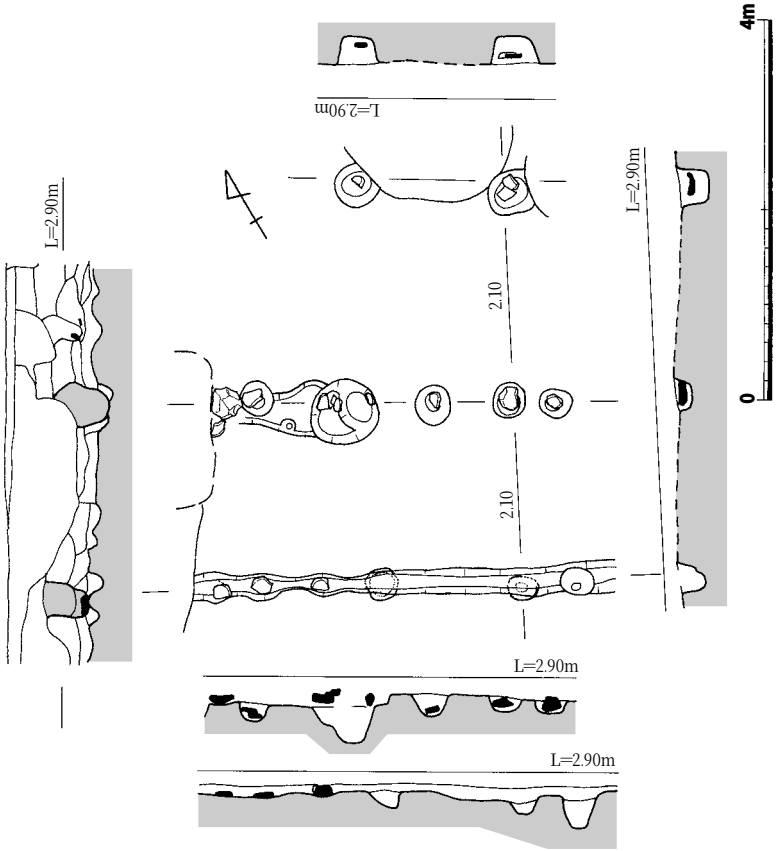
Fig.3　調査区遺構全体図（1/120）

建物規模の推定は出来ないが、建物が存在したと考えるので報告する。建物と考える各列の間隔はそれぞれ2.1mを測る。南側列は溝SD13内で礎石（根石）が検出されている。各礎石（根石）は長さ0.1～0.3mで、厚さが薄く小さな扁平な割石で、火を受けたものもあった。柱穴の深さは浅深があり、各列礎石間の距離も狭く一定していないことから建物の重複の可能性がある。**出土遺物**は各柱穴から少量の遺物がある。土師器・瓦器・青白磁、平瓦・土錘などの細片で、時期の判断や図示しうるものはない。

② 溝状遺構（SD）

SD04（Fig.5・6、Ph.7） 調査区北西側で検出した主軸をN－31°－Eに取る溝。南側はSK07に切られ、北側は攪乱などに切られ、残りは不良であるが、湾曲しながら北壁まで続く。確認規模は長さ11mで、幅は最大で1.3m、深さは南側で0.5m、北側で0.1mを測る。溝埋土は上層が黒褐色土、下層が暗褐色砂質土を主体とし、上層には貝殻や、炭化物などを含む。

出土遺物は中世の土師器、瓦器、瓦質土器、中国産青磁・白磁・陶器が中心で、近世の肥前陶磁器、



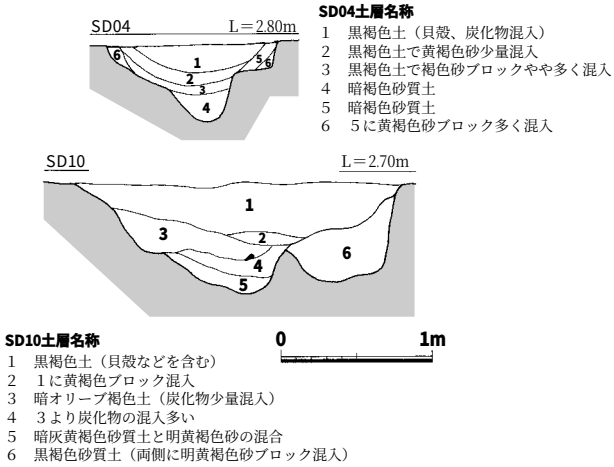


Fig.4 SB45（1/80）

調査区南側西壁土層

1 表土
2 焼土と漆喰など（近現代遺物含む）
3 暗灰黄色土（貝殻などを含む）
4 黒褐色粘質土（炭化物、焼土などを含む）
5 ４に灰黄褐色粘土ブロック混入
6 黒褐色土で暗灰黄色土含む
7 黒褐色土（砂礫。割石を含む）
8 ７で明黄褐色砂ブロック少量混入
9 黒色砂質土
10 黒褐色砂質土
11 灰黄褐色砂と明黄褐色地山砂ブロックの混合
12 黒褐色砂質土に明黄褐色砂ブロック混入
13 暗灰黄褐色砂で明黄褐色砂ブロック混入
14 黒褐色砂質土で明黄褐色砂少量混入
15 13よりやや暗い
16 15で14を混入
17 黒褐色砂と明黄褐色砂の混合
18 明黄褐色砂（粒子細かい）地山遺構面
19 鈍い黄色粗砂（地山）

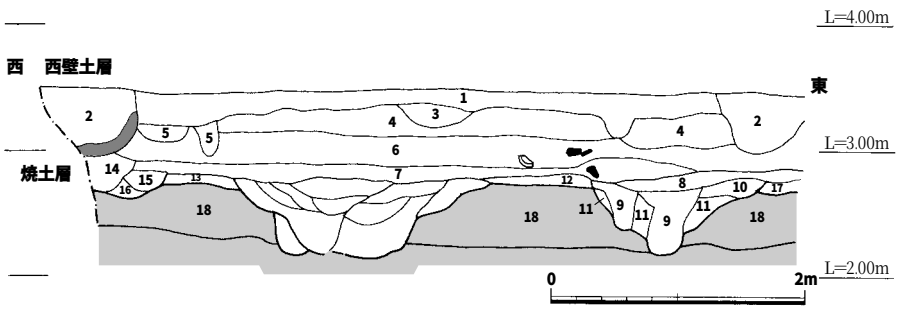


Fig.5 SD04・10・南側西壁土層（1/50・1/60）

瓦などを少量含む。近世まで継続しているのか。**1**～**4**は土師器小皿。いずれも下層出土。**1**・**2**は口縁の立ち上がりが低い形態。復元口径8.4cm・9.4cm、器高0.95cm・1.1cmを測る。**3**・**4**は口縁が開く形態。復元口径9.4cm・10cm、器高1.1cm・1.4cmを測る。底部は**1**・**2**が糸切り、**3**はヘラ切りか。**5**は瓦質土器の火鉢口縁部片。外面は菊花のスタンプが連続して付く。**6**は陶器で、18世紀前半の小石原焼擂鉢口縁片。内外面暗褐色系釉が薄めにかかる。内面には擂り目がある。上の原窯に類例がある。**5**・**6**は上層出土。**7**は下層出土の管状土錘。端部一部欠損。長さ4.6cmを測る。調整はナデ。**8**は扁円形の石球か。直径2.6×2.9cm、厚さ2.2cmを測る。調整は表面を粗く擦る。玩具であろうか。

SD10（Fig.5・6、Ph.8） 調査区中央部で検出した東西溝。攪乱やSK07土坑などに切られ残りは悪い。方向はSD04と直交し、SB45とほぼ並行する。溝断面としては残りのよい部分の土層から見る限り薬研堀（逆三角形）に近い。埋土は上層が貝殻などを含む黒褐色土、下層は暗オリーブ褐色土で、上層の埋土はSD04と同じである。

出土遺物は中世の土師器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、中国産青磁・白磁・陶器や滑石製石鍋、近世の肥前磁器などと、魚骨や瓦がある。**9**は土師器小皿。復元口径9.4cm、器高1.8cmを測る。底部は糸切り。**10**は黒色土器A類椀の底部。調整は外底部ナデ、内面はナデ。色調は内面灰色、外面浅黄橙色を呈す。下層出土で、SD04土層ベルト出土のものと破片が接合している。**11**は瓦器椀で復元口径16.8cmを測る。調整は回転ナデで、明瞭でないがヨコヘラミガキを加えるようである。**12**～**14**は下層出土の白磁。**12**は碗Ⅳ類の口縁部小片。**13**は碗Ⅷ-2類か博多編年のⅨ類の口縁部で、復元口径14.4cmを測る。内外面灰白色釉が薄めにかかるが、発色が悪い。内面に一条の沈線が巡る。**14**は小皿で復元口径10.0cmを測る。内面から外面上半は灰白色の不透明釉がかかるが、外底部は露胎。**15**は上層出土。青磁の口縁部で復元

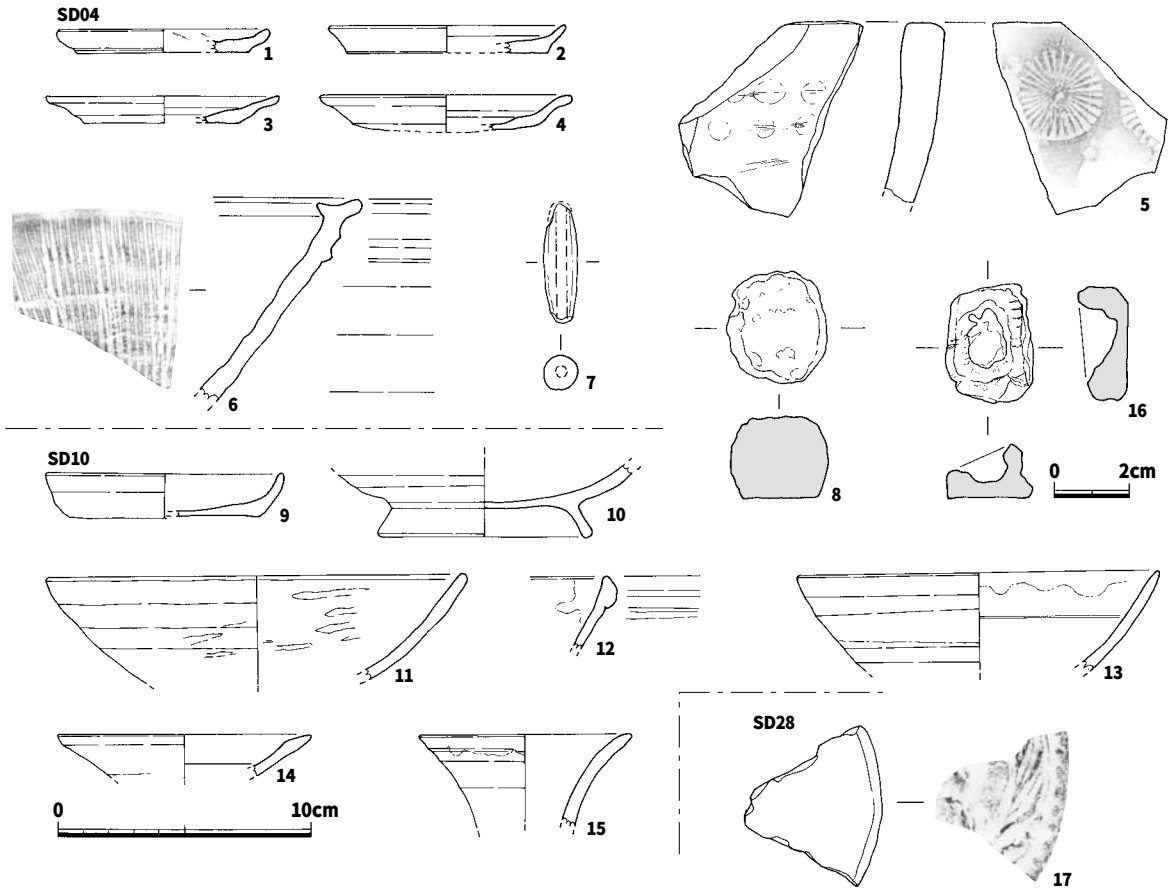


Fig.6　SD04・10・28出土遺物（1/3・1/2）

口径8.4㎝を測る。内外面緑灰色釉が厚めにかかるが、口縁外面一部釉がかからない。17世紀代の肥前青磁か。**16**は長方形状の滑石製品。縦長3.2㎝、横幅2.3㎝、最大高1.4㎝を測る。各面研磨仕上げ。上面中央部は穴を穿っているので容器か。江戸時代初めに埋められたものか。

SD13　SB45の南側の柱列と重複する小溝。幅0.15～0.3m、深さは5㎝前後と浅い。西側ではSD04に切られる。西壁を見ると箱堀でその底部に根石があることから建物の基礎と考える。

SD28（Fig.6）　SD28は調査区中央部で検出したSD10と並行する東西溝。溝幅は西壁で1.1m、深さ0.55mを測る。上層は焼けて赤くなっているが、下層は暗灰黄色砂質。

出土遺物は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産青磁・白磁・陶器、丸瓦・平瓦、滑石製品などがあるが、図化出来たものは少ない。**17**は中国系の波状押圧文瓦の軒丸瓦と思われる瓦頭小片である。周縁部に珠文が巡る。焼成はやや不良。

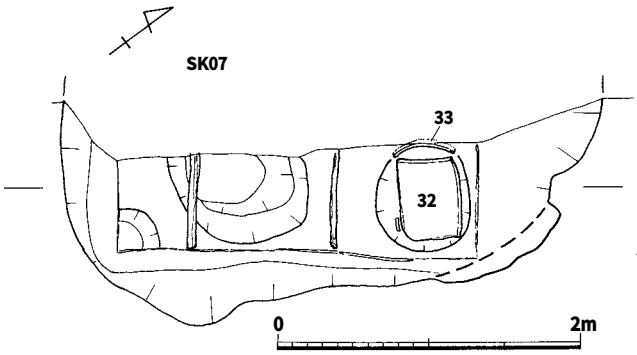
③　土坑（SK）

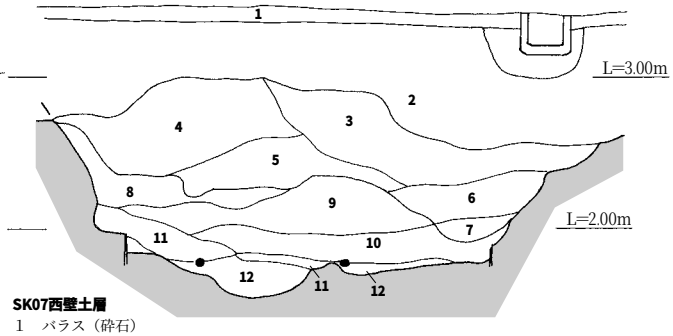
SK06（Fig.7・8・18、Ph.11）西側は攪乱を受ける不整楕円形状を呈す土坑。規模は長軸長1.35m、短軸幅1.14m、最大深さ0.65mを測る。埋土は黒褐色土で、上～中層にかけて多くの最大長15㎝内の自然礫や割石が出土。廃棄土坑であろうか。

出土遺物は中世の土師器、黒色土器、瓦器、風炉のような瓦質土器、中国産白磁・青磁・陶器、陶器の擂鉢、平瓦などの小片がある。**18**は土師器の小皿。復元口径6.6㎝、器高0.9㎝を測る。底部糸切り。**19**は黒色土器B底部で復元底径8.4㎝を測る。調整は外面ヨコナデ、内底部はヘラミガキ。**20**・**21**はいずれも白磁皿IX類。**20**は口縁小片。**21**は底部片で復元底径6.0㎝を測る。いずれも釉は厚めにかかるが、**20**は体部下半と**21**の高台内は露胎。**20**の釉の発色は不良。**22**は同安窯系青磁碗Ⅰb類の底部。底径5.4㎝を測る。釉色は浅黄色を呈し、焼成はやや不良。外底部はケズリで露胎。畳付は擦っている。**20**・**21**以外は中～下層出土。**161**は鉄釘。先端を欠くが、残存長5.4㎝を測る。断面は方形を呈す。以上の遺物から遺構の時期は13世紀～14世紀初めと考える。

SK07（Fig.7～9・18、Ph.9・10）　調査区中央部で検出した近世の大型の土坑。規模は上面で長軸長3.6m、短軸幅1.4m、深さ1m以上を測る。底面は腐食が進むが木の皮に近い薄い板材で方形の枠を作りその間を二本の径5㎝の丸太材で三区に区切っている。その枠の規模は長軸長で2.4m、短軸幅は0.6mを測る。内部の区画幅は南区画から0.5m・0.75m・0.75mで、北側底面の丸い窪みには幅0.42m、長さ0.55mの平瓦を置き、その西端にほぼ同大の平瓦を立てていた。中央の区画には深さ0.2mの浅い円形のピットがある。埋土は黒褐色土やオリーブ黒色土、褐色土を主体とする埋立て土で、炭化物などを含んでいる。地下倉庫のようなものか。

出土遺物は中世～近世の遺物が出土している。近世は国産の陶磁器、瓦類、土錘などがある。**23**は土師器の坏。復元口径14.4㎝、器高2.5㎝を測る。底部は丁寧なナデで平滑に仕上げ、その他は回転ナデ。**24**・**25**は近世白磁。**24**は小坏で復元口径6.8㎝を測る。内外面くすんだ灰白色釉がかかる。**25**は鉢で輪花状を呈す口縁部で焼き歪む。復元口径18.0㎝、最大高4.9㎝を測る。光沢のある釉が厚めにかかるが、高台内面は露胎。底部は蛇ノ目凹型高台。**24**・**25**とも口縁部が外反する形態から19世紀前半の肥前磁器であろう。**26**は陶器の鉢で復元口径24㎝を測る。褐色釉の上に灰白色釉を部分的にかけるが、口唇部は無施釉で鉄漿を塗る。藤崎の西皿山の高取窯産か。**27**は平瓦片。残存長29.3㎝を測る。凹面はナナメのハケ目、凸面はハケ目後ナデ。**28**は三巴文の軒丸瓦の瓦当。直径11.6～12.0㎝を測る。文様はやや崩



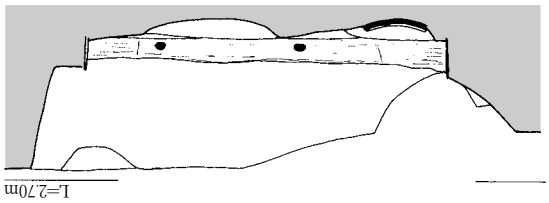


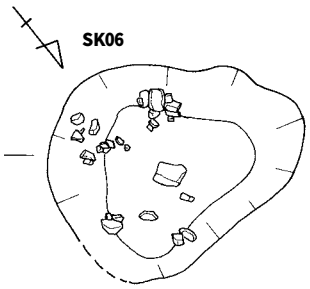
SK07西壁土層

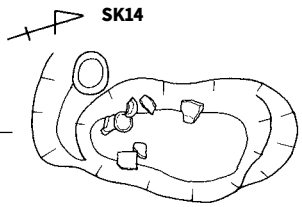
1　バラス（砕石）
2　攪乱
3　黒褐色土（礫や貝殻を含む埋立土）
4　黒褐色土
5　明黄褐色粗砂と礫・黒褐色粘土ブロックの混合
6　黒褐色粘土と黄褐色粘土
　（炭化物、貝殻、生活廃棄物など含む）
7　黄褐色粗砂と黒褐色土の混合（貝殻含む）
8　黒褐色土（埋立て土で炭化物含む）
9　明黄褐色粗砂と黒褐色土の混合
10　オリーブ黒色土
11　10に黄褐色砂混入
12　褐色砂に黒色土を薄く挟む。

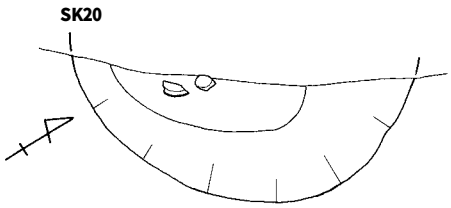
SK20土層名称

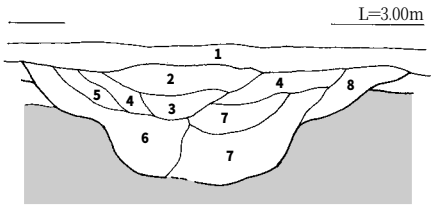
1　黒褐色土（砂礫、割石含む）
2　黒褐色土
3　２より粒子が緻密
4　２に明黄褐色砂少量混入
5　４より明黄褐色砂の混入やや多い
6　黒褐色砂質土と明黄褐色砂ブロックの混合
7　４より明黄褐色砂の混入少ない。
8　暗灰黄褐色砂に明黄褐色砂ブロック少量混入

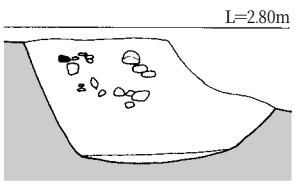


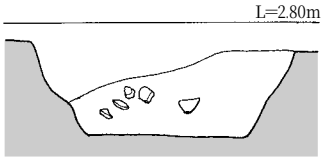


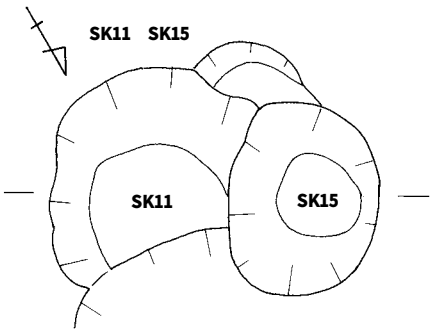


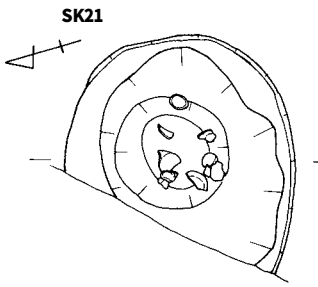


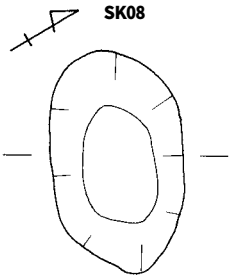


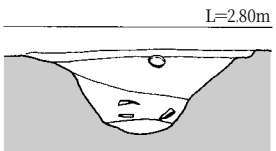


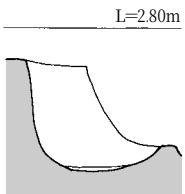












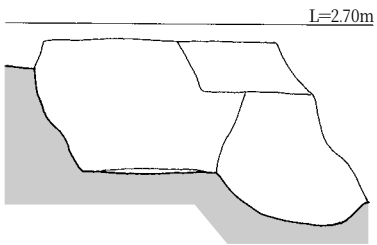


Fig.7　SK06～08・11・14・15・20・21（1/40・1/50）

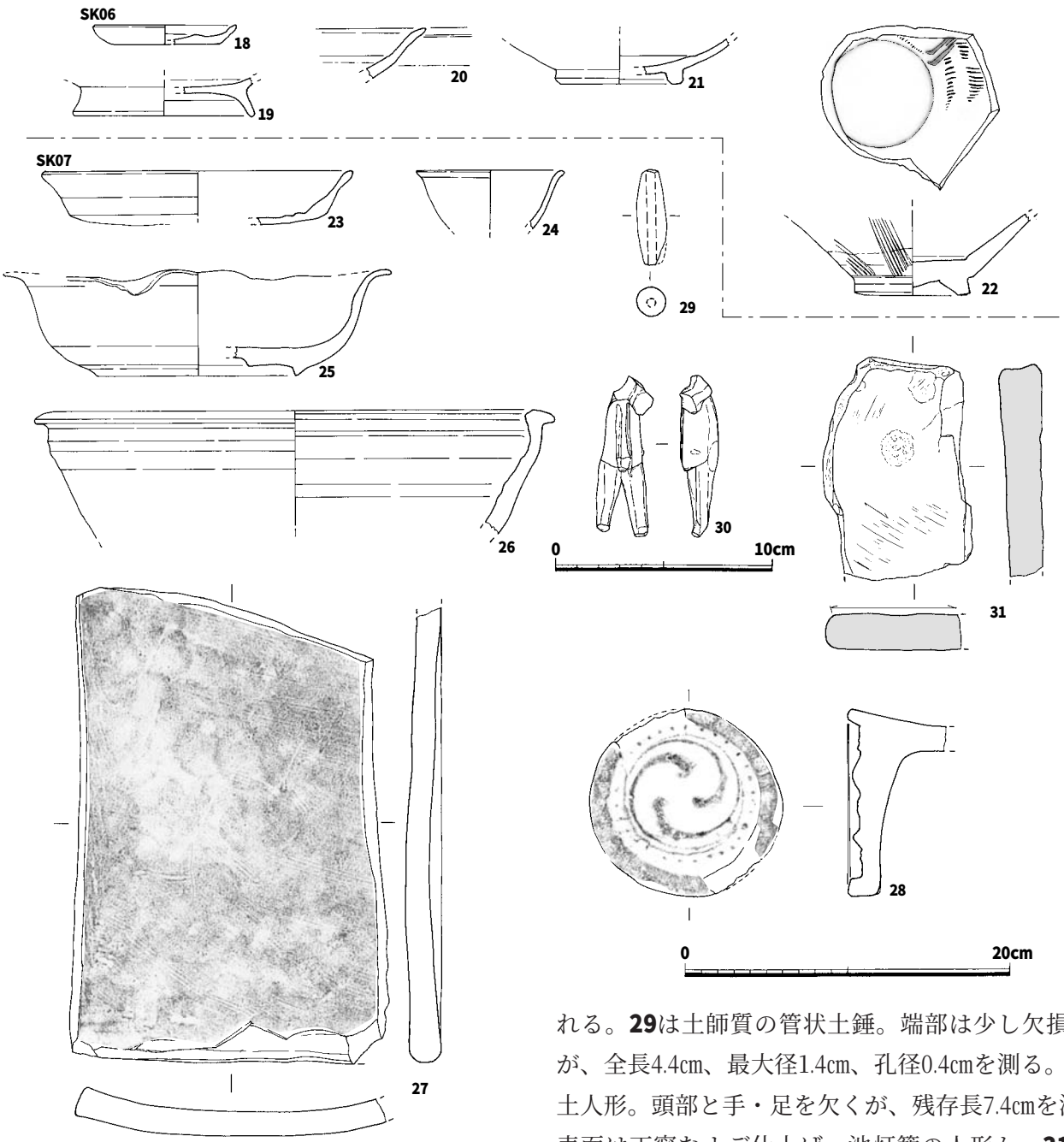


Fig.8　SK06・07出土遺物（1/3・1/4）

れる。**29**は土師質の管状土錘。端部は少し欠損するが、全長4.4㎝、最大径1.4㎝、孔径0.4㎝を測る。**30**は土人形。頭部と手・足を欠くが、残存長7.4㎝を測る。表面は丁寧なナデ仕上げ。池灯籠の人形か。**31**は扁平な砥石。残存長10.3㎝、最大幅6.3㎝を測る。表面には使用痕が残る。**32**・**33**は遺構底北側ピットから出土した平瓦状の製品。**32**は底に凹面を上に置き、**33**はその西側に立て置かれていたもの。**32**は最大長55.2㎝、最大幅40.3㎝、器厚1.5～2.1㎝、**33**は最大長56.9㎝、最大幅41.0㎝、器厚1.5～1.9㎝を測る。各側面は丁寧なナデ、凹凸両面はハケ目。色調は暗青灰色・暗緑灰色を呈し、焼成は良好。**33**の測面は若干欠損する。**32**・**33**とも広端部両隅に径約2㎝の円孔がある。**162**は蹄鉄。縦長11.5㎝、横幅10.9㎝、幅2.0～2.5㎝、厚み1.0～1.1㎝を測る。蹄鉄は明治時代初めから日本で使用し始める。明治期にこの土坑は埋まったのであろう。

SK08（Fig.7・10）　SD10に切られた楕円形状の土坑。規模は長軸長1.2m、短軸幅0.7m、最大深さ0.6mを測る。埋土は黒褐色土。

出土遺物は中世の土師器小皿・坏などがあるが、量は少ない。**34**は土師器の小皿1/5片。復元口径9.4㎝、器高1.4㎝を測る。底部糸切り。

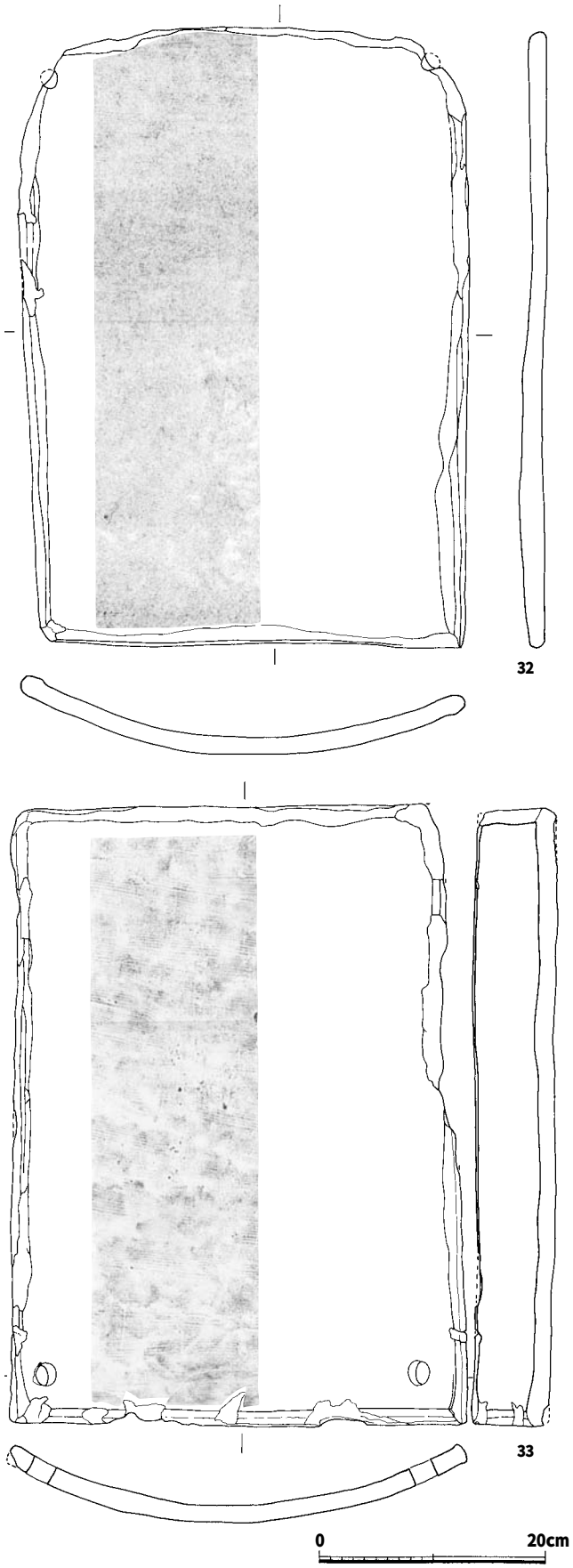


Fig.9　SK07出土遺物（1/6）

SK11（Fig.7・10）　SD10に切られた土坑。全体形状は不明であるが、現状では円形を呈す。埋土は黒褐色砂質土である。

出土遺物は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産青磁・白磁・陶器などと古代須恵器も出土しているが、量はそれ程多くない。**35**・**36**は土師器の坏。口径14.4cm・14.8cm、器高2.8cm・2.9cmを測る。底部は糸切り。**37**～**39**は瓦器椀。いずれも破片である。復元口径15.2cm・16.0cm・17.2cmを測る。調整は高台部が貼付けでヨコナデ。体部はヘラミガキで表面平滑に仕上げるが、**37**の体部には指押え痕が残る。以上から遺構の時期は12世紀中～後半頃と考える。

SK14（Fig.7・10・18、Ph.12）SB45内で検出した長方形状土坑で、柱穴SP11に切られる。規模は長軸長1.40m、深さ0.5mを測る。断面は逆台形で、底面は平坦である。埋土は黒褐色土で、南側では土器や扁平な割石などが出土している。廃棄土坑であろうか。

出土遺物は中世のほぼ完形の瓦器皿、中国産白磁、陶器の細片などがある。**40**は瓦器の皿で口縁部を一部欠く。口径10.1cm、器高1.9cmを測る。底部糸切り、調整は体部と内底はヘラミガキ。**41**は白磁碗Ⅳ類の底部。底径7.3cmを測る。内面に不透明の淡黄色釉がかかり、外面は露胎。**42**は褐釉陶器甕。外面褐色釉上に濃緑色釉がかかる。**163**は鉄釘か。先端を欠くが残存長5.5cmを測る。断面は方形を呈す。**164**は鍵状に曲がる鉄製品。両端を欠くが長さ3cmを測る。断面長方形を呈す。12世紀後半頃の時期か。

SK15（Fig.7・10）　SK07・SX02に切られ、SK11を切る楕円形状の土坑。長軸長1.05m、短軸長0.8m、深さ0.6mを測る。埋土は黒褐色砂質土で灰褐色粘質土混入。

出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・青磁などがある。**43**は土師器小皿。小片で復元口径9.2cmを測る。**44**は白磁碗Ⅳ類の底部。底径7.0cmを測る。高台内には文字の一部と思われる墨書がある。

SK20（Fig.7・10、Ph.13）　調査区南側で検出した西壁にかかる円形の土坑。規模は長軸長1.8m、深

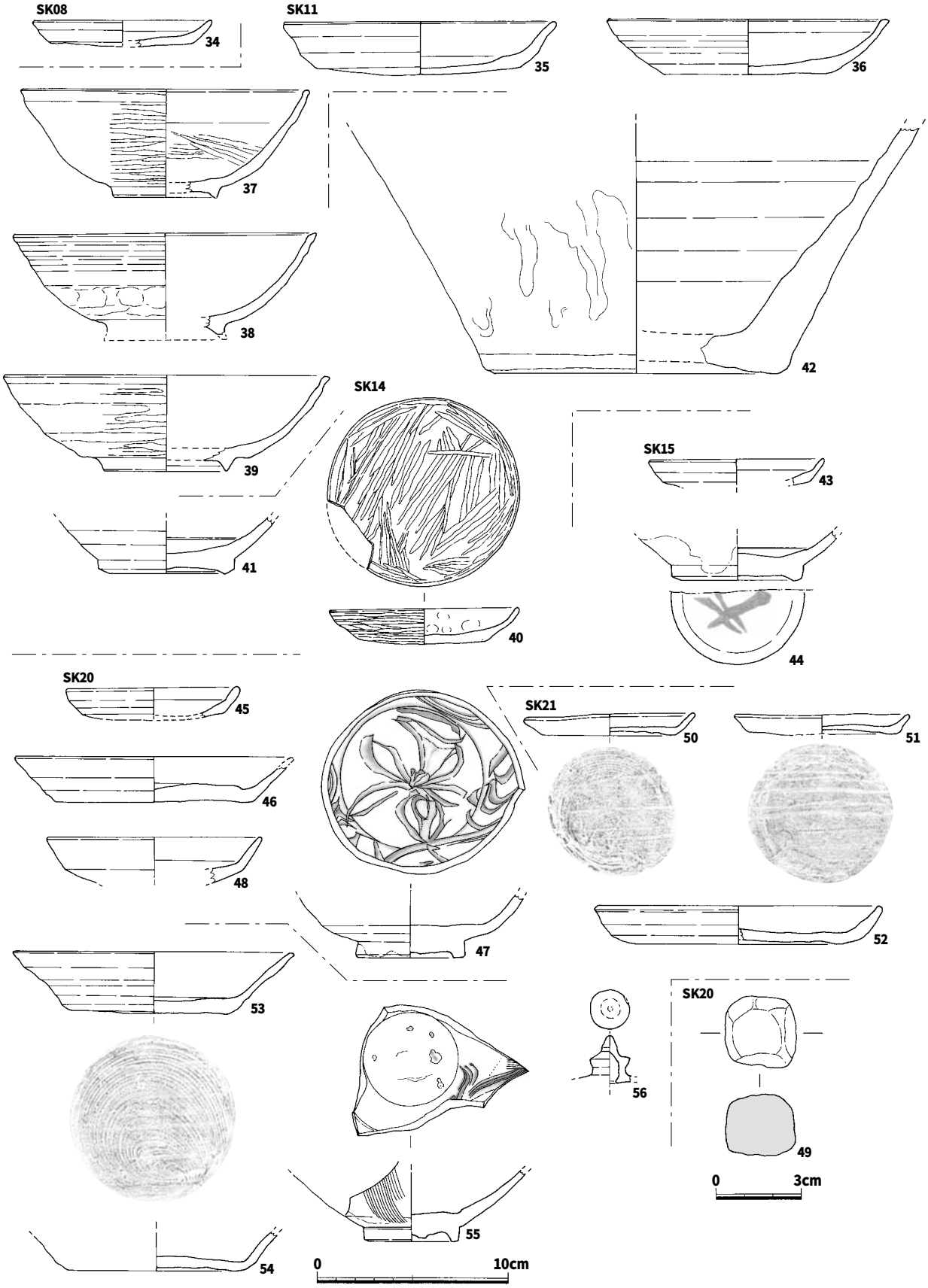


Fig.10　SK08・11・14・15・20・21出土遺物（1/3・1/2）

さ0.6mを測る。土層断面から2基の遺構の切り合いの可能性がある。埋土は黒褐色砂質土が主体となる。遺構の南側に礫石が出土している。

出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産青磁・白磁・陶器、炭化物などが出土している。**45・46**は土師器。**45**は小皿で復元口径9.2cmを測る。**46**は坏で口縁部を欠く。外面半分程黒く青みを帯びる。底部は糸切り後ナデ。**47・48**は青磁。**47**は龍泉窯系碗Ⅰ類の底部。底径5.8cmを測る。見込みは片切彫りの草花文で、高台以外に灰オリーブ釉がかかる。**48**は皿Ⅰ類口縁片で、復元口径11.4cmを測る。表面にはオリーブ灰釉が厚めにかかるが釉の発色は良い。**49**は方形に近い石球又は瓦玉。直径2.5cm、厚さ2.2cmを測る。粗割後、表面を擦って平滑に仕上げる。色調は鈍い黄橙色を呈す。12世紀後半頃か。

SK21（Fig.7・10・18、Ph.14） 調査区南側で検出したSK23を切る土坑。一部西壁にかかるが、平面形は円形を呈すと思われ、底面は二段掘りの擂鉢状を呈す。規模は上面で南北長1.2m、東西長1.2m、最大深さ0.4mを測る。埋土は黒色土が主体。中央のピット状の落込みには完形を含む土師器の皿・坏などが出土している。

出土遺物は中世の土師器、瓦器、黒色土器、須恵器、中国産白磁・青磁・陶器、鉄釘、鉄滓、焼土塊などがある。**50**～**54**は土師器。**50・51**は小皿。**51**は完形。いずれもやや歪むが口径9.2cm・9.1cm、器高1.1cm・1.2cmを測る。**52**は皿又は盤で復元口径15.2cm、器高2.0cmを測る。**53・54**は坏。**53**は口縁が開く形態。口縁部を3/4欠く。復元口径14.9cm、器高3.2cm、底径8.8cmを測る。**54**は口縁部を欠く。底径10.0cmを測る。**50**～**54**は底部糸切りで板状圧痕が残る。**55**は同安窯系青磁碗Ⅲ-1c類底部。底径5.0cmを測る。外底高台部はケズリで露胎。体部から見込み部は不透明な灰オリーブ釉がかかる。見込みには黒い斑点があり、胎土には空隙がある。**56**は陶器蓋の摘み。摘み径2.1cmを測る。外面は暗褐色のまだらが入る黒褐色釉がかかるが、内面は露胎。**165**は鉄釘か。頂部は丸く曲がり、先端は尖る。長さ5.8cmを測る。断面は方形である。以上の遺物から遺構の時期は12世紀後半と考える。

SK23（Fig.11・12・18、Ph.15・16・17・26） 調査区南側、SK21に切られる隅丸長方形を呈する土坑。長軸長2.48m、短軸幅2.0m、深さ0.8mを測る。底面はほぼ平坦だが、中央部がやや深くなる。埋土は上層～中層は黒褐色土が主体で、下層は黒色砂質土と褐色砂の混合層である。底面南側中央に人の頭蓋骨の一部が残り、その東側には土師器の小皿11枚と坏と白磁碗各1枚が床面から10cmほど浮いた状態で出土した。鉄釘が多数出土しているので、木棺墓と考えられる。土師器の小皿など副葬品は出土位置から棺の横に置かれていたと考える。

出土遺物は副葬品として完形又は完形に近い土師器小皿・坏、中国産白磁碗などと、埋土から中世の土師器、須恵器、中国産白磁・陶器、瓦器椀、鉄釘がある。**57**～**71**は土師器。**57**～**69**は小皿。口径8.4～9.4cm、器高1.0～1.4cmを測る。**70**は坏で一部1/8片を欠く。口径16.0cm、器高3.2cmを測る。皿・坏とも底部糸切りで板状圧痕が残る。**71**はミニチュア土器の椀。口径3.2cm、器高1.6cmを測る。調整はミガキに近い丁寧なナデ、内面赤褐色を呈し、顔料が付着か。**72**～**74**は白磁。**72**は完形の碗Ⅴ-4b類。口径18.0cm、器高6.7cmを測る。光沢をもつ不透明な浅黄色釉がかかるが、高台内はケズリで露胎。**73**は碗Ⅴ-２類の口縁部片。復元口径16.2cmを測る。体部内面には2条の沈線が巡る。浅黄色釉が薄めにかかるが、表面にはピンホール状の孔が多く入る。**74**は碗Ⅱ類の底部片で復元底径6.7cmを測る。高台内面はナナメに削る。体部は灰白色釉がかかるが、高台部は露胎。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。**75**は須恵器の細片を粗く打欠いた瓦玉。径1.7×2.2cmを測る。**166**～**172・183～187**は鉄釘で木棺に使用されたもの。いずれも頭部は直に曲がり、先端は尖る。**166・167・169・170・183～187**は木質が付着する。長さ6.2～7.9cmを測る。断

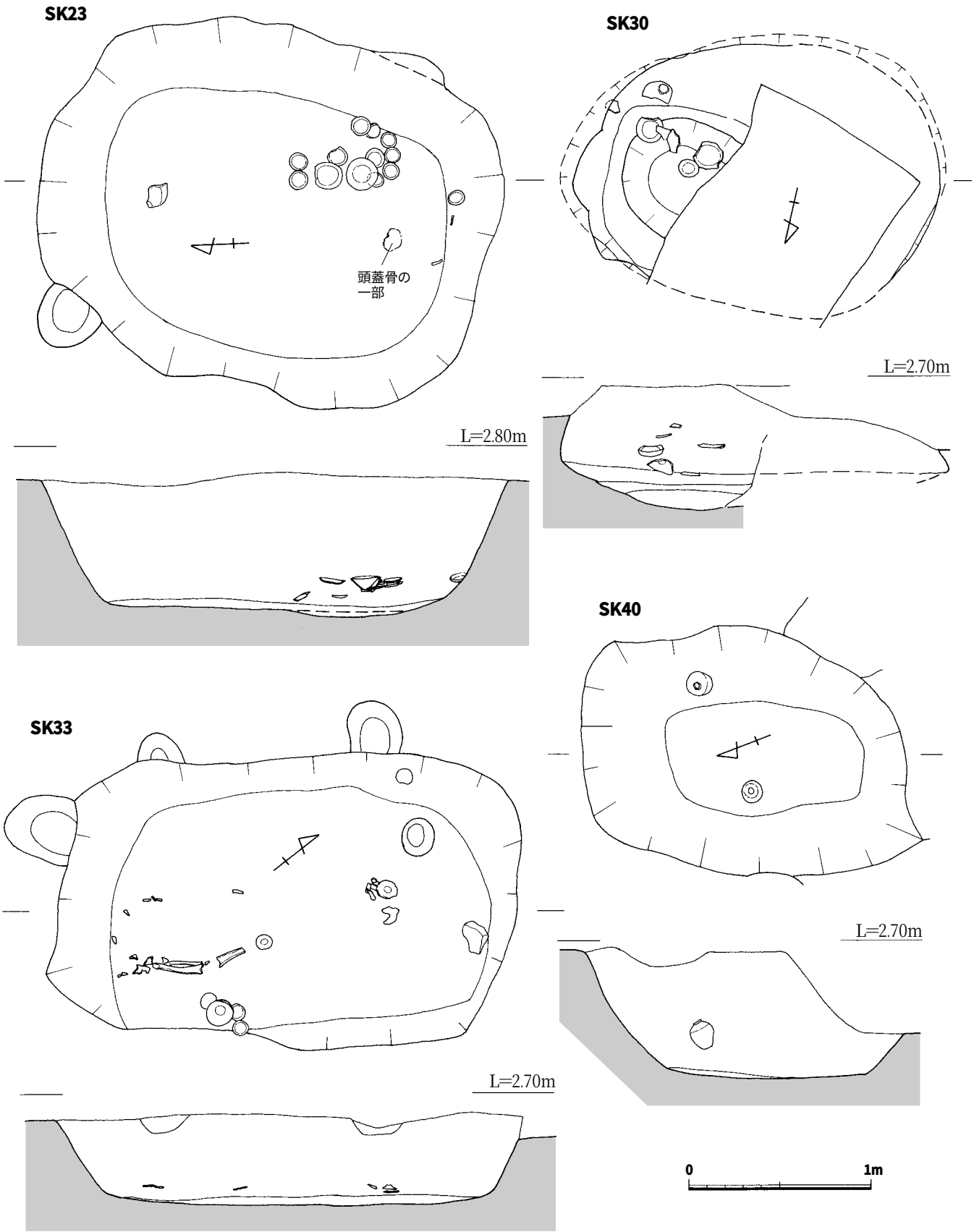


Fig.11　SK23・30・33・40（1/30）

面は方形又は長方形。この外29本の釘の小片がある。以上の遺物から遺構は12世紀後半の時期と考える。

SK25出土遺物（Fig.12）　SX18攪乱に切られる楕円形状の浅い土坑。残存長0.84m、幅0.45m、最大

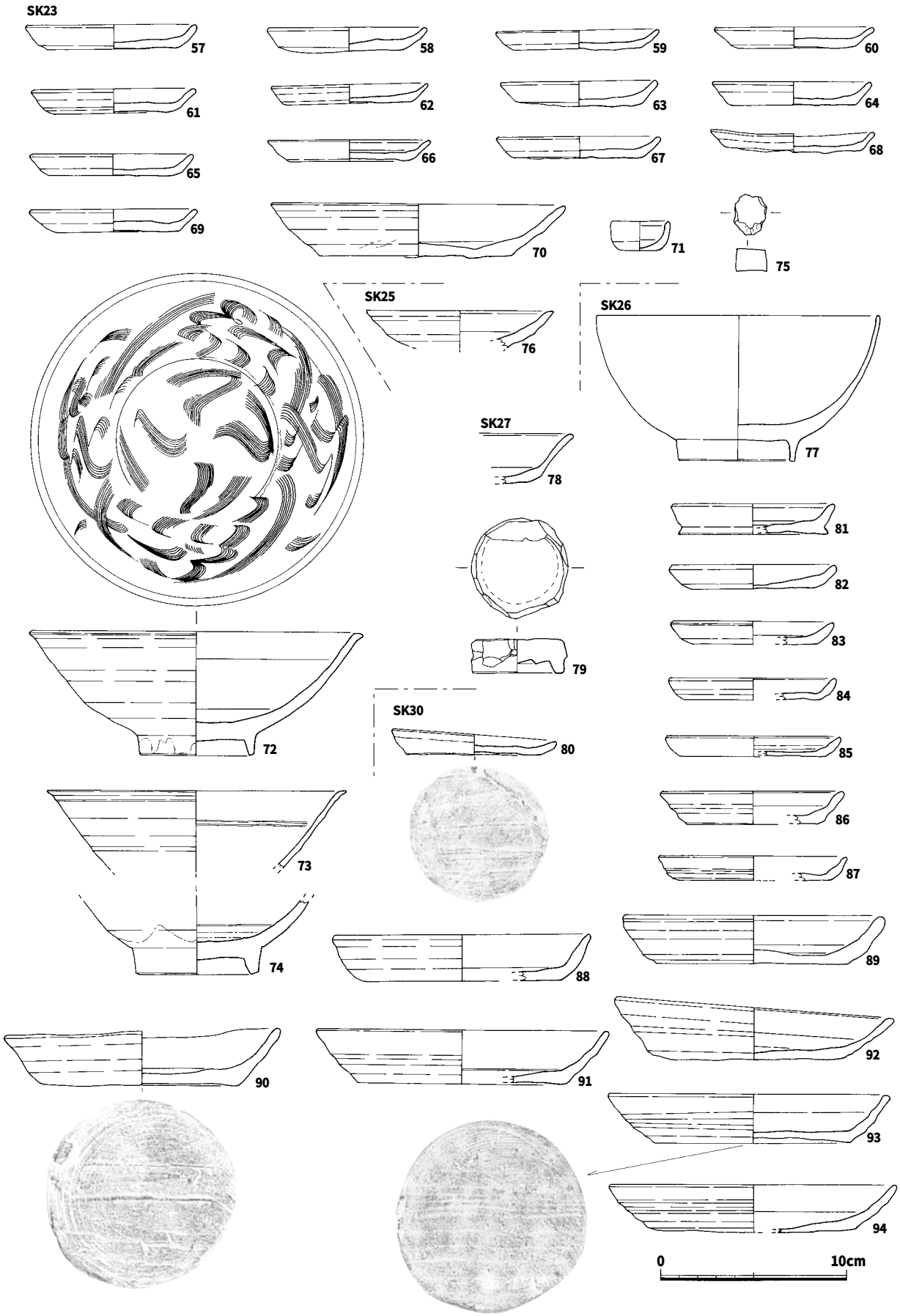


Fig.12　SK23・25・26・27・30出土遺物（1/3）

深さ0.3mを測る。埋土は灰褐色砂混じり粘質土で、SD28の一部の可能性がある。越州窯系青磁や、中世土師器、瓦器椀、中国産白磁・青磁・陶器などの細片が少量出土。**76**は白磁皿Ⅲ-2類で復元口径10.2㎝を測る。くすんだ淡黄色釉が内外面かかる。

SK26出土遺物（Fig.12） 調査区中央部の一部東壁にかかる不定形状の土坑。長軸長1.2m、短軸幅0.72m、最大深さ0.38mを測る。埋土は黒褐色粘質土。中世の土師器小皿、中国産白磁・青磁・陶器、瓦などの細片がある。**77**は白磁碗で口径15.4㎝、器高7.9㎝を測る。灰白色の釉が全面にかかるが、内面は砂粒が付着する。肥前磁器Ⅲ期17世紀後半のものか。

SK27出土遺物（Fig.12・18） 調査区中央部で検出した、SD28に切られ、SK33を切る長方形状の土坑。長軸長1.34m、短軸幅0.94m、埋土は黒色土を主体とする。中世の土師器、須恵器、瓦器、黒色土器A類、中国産白磁・青磁などがある。**78**は土師器坏口縁部細片。底部糸切り。**79**は青磁碗底部を再利用した瓦玉。径5.3×5.5㎝を測る。縁辺は粗く打ち欠く。見込みにはくすんだ不透明の鈍い黄橙色釉がかかる。**173**～**175**は鉄釘。頭部は直に曲がるが、残存長2.9～4.3㎝で比較的小さい。断面は方形を呈す。

SK30（Fig.11・12・14、Ph.20・26） 調査区南側で検出した、西半分に攪乱を受けた、平面楕円形を呈す土坑。長軸長2.0m、最大幅1.5m、最大深さ約0.7mを測る。壁面は抉れ、部分的に崩落がある。底面は二段堀状を呈す。埋土は黒色土が主体である。東側の中層部分から完形に近い土師器坏・皿などが出土していることから墓の可能性もある。

出土遺物は中世の土師器、須恵器、瓦質土器、中国産白磁・青磁・陶器、平瓦・丸瓦などがある。**80**～**94**は土師器。**80**～**87**は小皿。**80**は完形で歪みが大きい。**80**～**85**は口径8.8～9.4㎝、器高1.2～1.6㎝を測る。**86**・**87**は口径10.0㎝・10.2㎝、器高1.8㎝・1.3㎝を測る。底部は**86**が丁寧なナデ以外、いずれも糸切りで、**80**・**83**には板状圧痕が残る。**88**～**94**は坏。いずれも破片だが、口径14.0～15.8㎝、器高2.5～3.4㎝を測る。底部はいずれも糸切りで、板状圧痕が残る。**95**・**96**は中国産の白磁。**95**は景徳鎮窯白磁碗小片。器壁は薄く精緻な作り。口縁部釉の口剥げ、外面は雷文とその下に印花文を施す。**96**は底部片。復元底径5.8㎝を測る。高台部は露胎で、内面はナナメにケズリ出す。**97**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4a類。口縁部片で復元口径16.1㎝、器高6.2㎝を測る。見込みに片切彫りの花文を入れる。体部から内面には灰オリーブ釉が厚めにかかるが、高台はケズリ後ナデで露胎、輪状に重ね焼きの痕跡が残る。**98**は丸瓦の玉縁片。凸面は縄目叩き、凹面は細かい布目痕が残る。側面は切り目を入れ分割している。以上の遺物から遺構は12世紀後半と考える。

SK33（Fig.11・14・18、Ph.15・18・19・25・26） 調査区中央部で検出した隅丸長方形を呈す土坑。規模は長軸長2.5m、短軸長1.61m、最大深さ0.5mを測る。底面中央部に北側に頭を向けた人骨が残っていた。人骨は脆いが、頭蓋骨の一部と脚部の一部が残る。頭蓋骨の横に輪花の青白磁皿、滑石製の権と、中国新時代（西暦14年）の貨泉が各1、下肢骨の部分には青磁碗1と土師器小皿3、腰の部分に白磁皿1が副葬品として供えられていた。また鉄釘が多数出土している。土層を見ると埋土は黒褐色砂を主体とするが、木棺らしき落込みが確認出来、鉄釘の出土から木棺墓と考える。

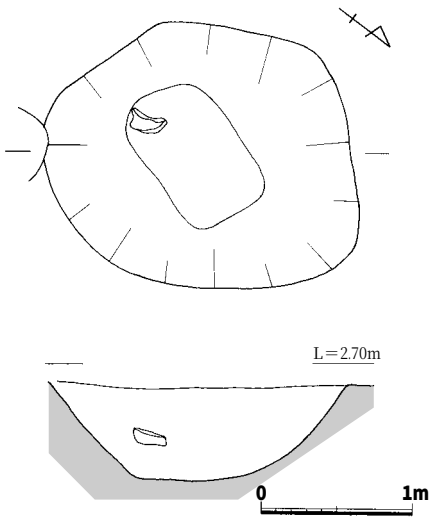


Fig.13　SK38（1/40）

出土遺物は副葬品以外に、中世の土師器、須恵器、瓦質土器、

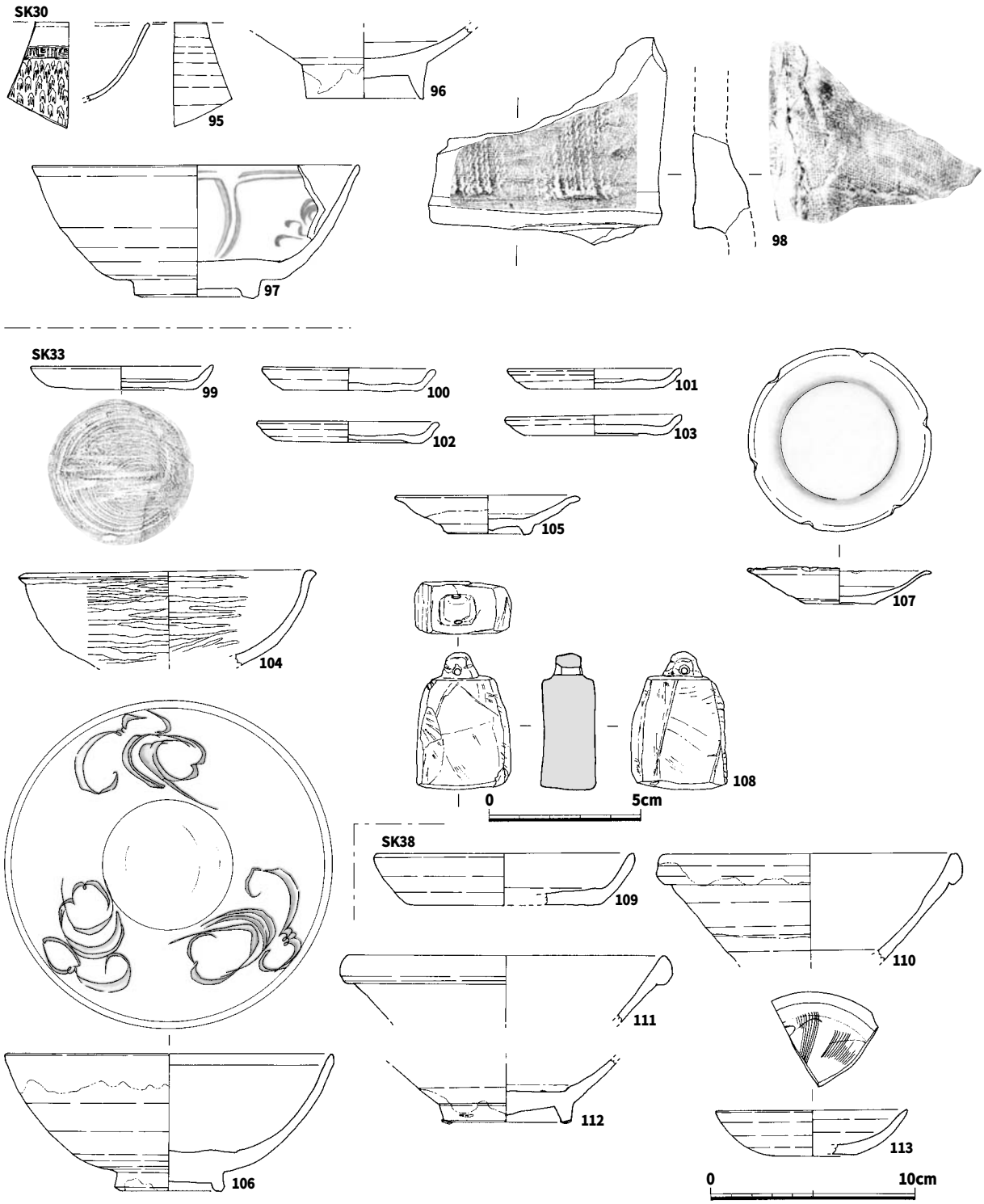


Fig.14　SK30・33・38出土遺物（1/3・1/2）

瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、平瓦・丸瓦、鉄釘などがある。**99**～**103**は土師器小皿。**99**～**101**は完形。口径8.6～9.0㎝、器高1.0～1.2㎝を測る。いずれも底部糸切りで板状圧痕が残る。**102**が下層出土以外は副葬品。**104**は黒色土器B類椀で復元口径14.6㎝を測る。調整は内外面ヨコヘラミガキ。下層出土。**105**は白磁皿Ⅲ-1類で完形。口径9.2㎝、器高1.9㎝を測る。見込みは蛇ノ目釉剥ぎする。体部下半から高台はケズリで露胎。畳付は擦る。灰白色釉が厚めにかかる。**106**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-3a類で完形。口径16.1㎝、器高6.7㎝を測る。内面に片切彫りで雲文状の文様を施す。高台内面以外は透明感があり、光沢

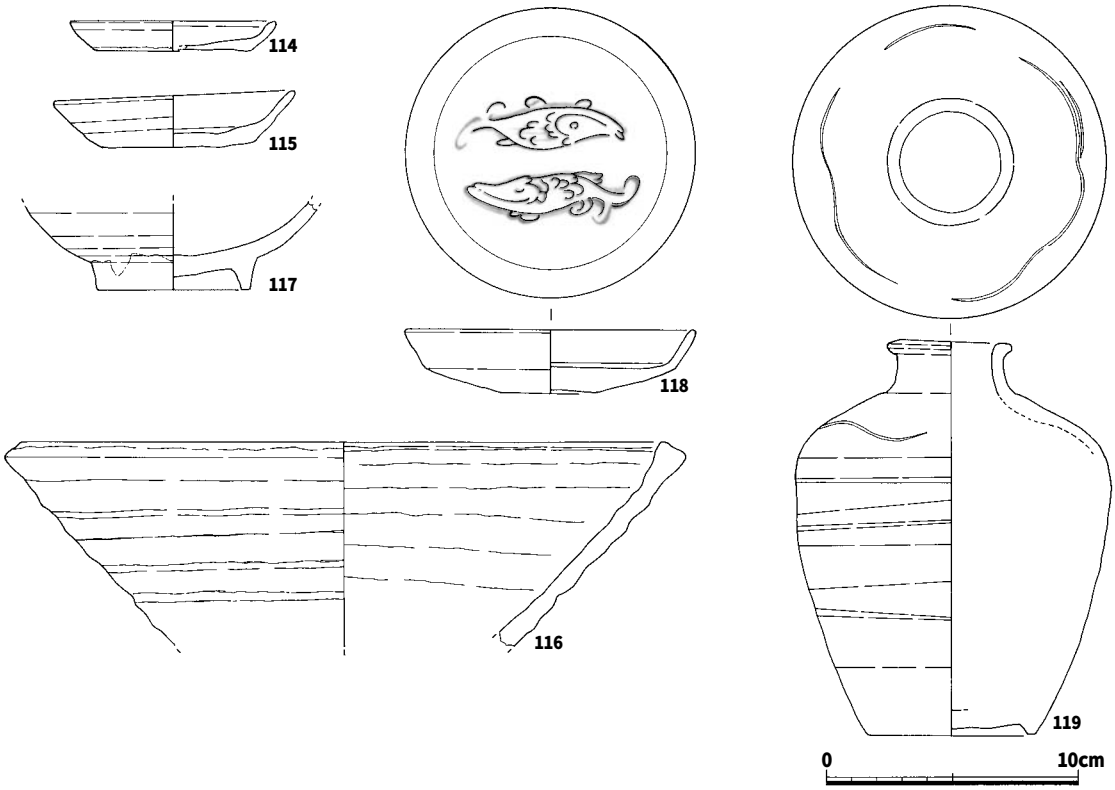


Fig.15　SK40出土遺物（1/3）

を持つオリーブ灰釉が厚めにかかる。口縁両面には氷裂が入る。**107**は青白磁の輪花皿で完形。口径9.0㎝、器高1.75㎝を測る。器面には光沢のある青味がかった明緑灰色釉がかかるが、外底部は露胎で、重ね焼き痕跡が残る。焼成は良い。**108**は滑石製品の分銅形の権（おもり）。表面に僅かな傷があるが、ほぼ完存。高さ4.4㎝、幅3.1㎝、厚さ1.65㎝、重さ44.26gを測る。摘み部分に径0.2㎝の孔がある。表面はミガキ仕上げである。**176**～**182・188**は鉄製品。**176**は鋏片。残存長9.85㎝を測る。副葬品として供えられていたもので、骨の一部が錆と一緒に付着していた。**177**は二股に分かれた簪の一部か。残存長6.3㎝を測る。**176**と同様に副葬品である。**178**～**182・188**は釘。いずれも頭部は曲がり、先端を欠損するものもあるが、残存長4.9～5.9㎝を測る。断面は方形を呈す。先端には木質が付着していた。図示していないが外に18本の釘片がある。**189**は貨泉。直径2.31×2.35㎝、厚さ0.18㎝、重さ2.11gを測る。中央には0.64×0.68㎝の方形孔がある。頭部近くに供えられた副葬品。以上から遺構は12世紀中頃～後半の時期と考える。

SK38（Fig.13・14、Ph.21）　調査区北側で検出した平面形が不整円形の土坑。規模は長軸長2.0m、短軸長1.86m、最大深さ0.74mを測る。底面は狭くなり、隅丸長方形を呈す。埋土は黒褐色に近い暗灰黄褐色貝・炭化物混じり土で、上部ほど貝の混入が多い。

出土遺物は中世の土師器、瓦器、瓦質土器、中国産白磁・青磁・陶器、平瓦・丸瓦、砥石などがあるが、細片が多く図示出来るものは少ない。**109**は土師器坏口縁部片で復元口径12.8㎝、器高2.5㎝を測る。底部糸切りで板状圧痕が残る。上面で出土。**110**～**113**は白磁。**110・111**は碗Ⅳ類の口縁部片で復元口径14.4㎝、16.4㎝を測る。口縁から体部にかけて**110**は不透明の灰黄色、**111**は浅黄色釉がかかる。**112**は高台をナナメにケズリ出した底部。高台径6.3㎝を測る。光沢のない灰白色釉がかかるが、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、高台部は露胎。**113**は皿Ⅷ類で復元口径9.4㎝、器高2.2㎝を測る。内面櫛描き文様を施す。外底は釉を掻き取る。出土遺物から遺構の時期は13世紀か。

SK40（Fig.11・15、Ph.22・23・26）　調査区北側SK38に切られる土坑。平面形は不整隅丸長方形を呈す。規模は長軸長1.86m、短軸長1.37m、最大深さ0.7mを測る。底面は長方形状を呈し、規模は長軸

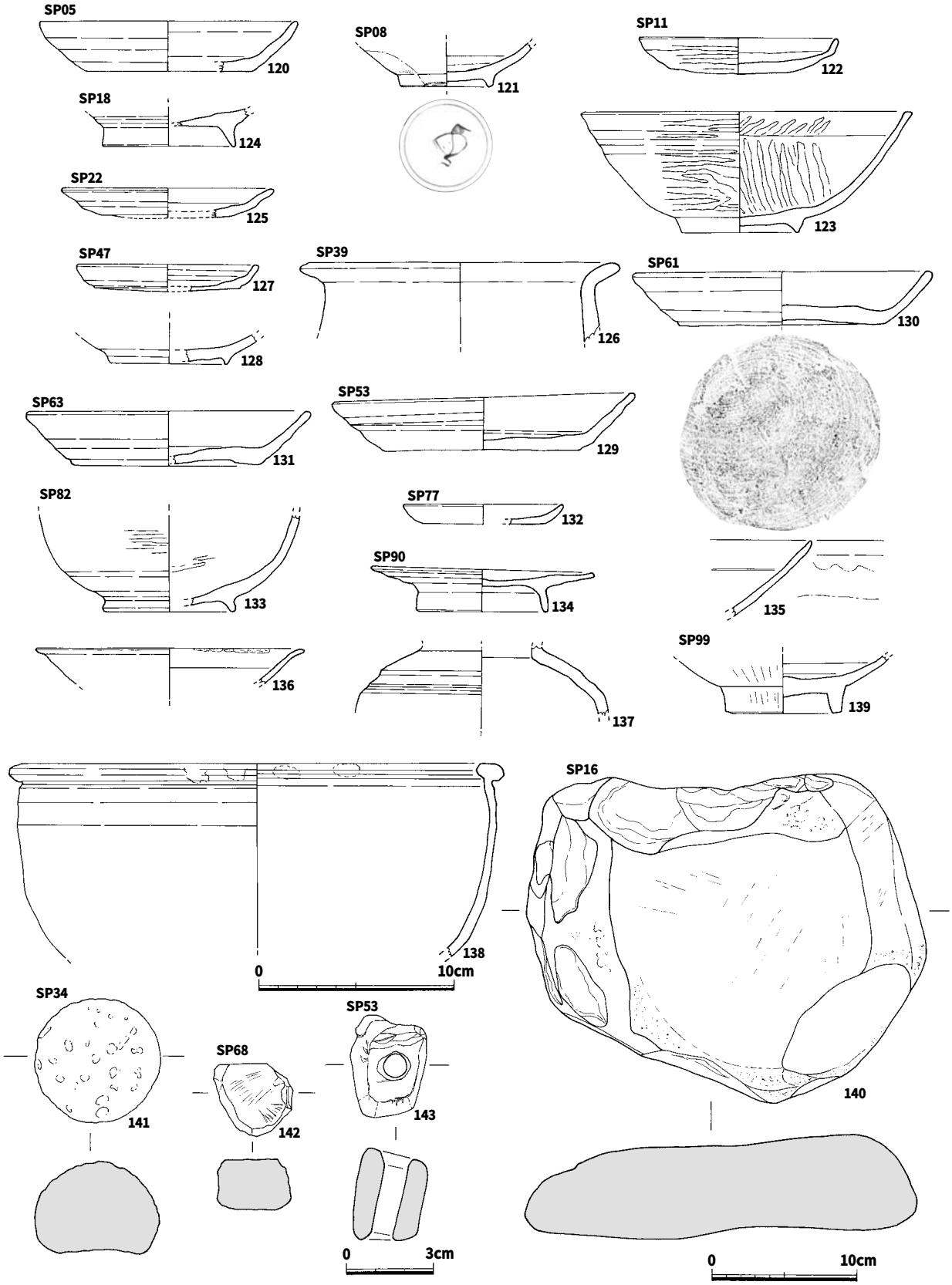


Fig.16　ピット出土遺物（1/2・1/3・1/4）

長1.09m、短軸長0.63mを測る。埋土は暗褐色砂で下部は黄褐色地山砂を混入する。底面から10㎝ほど上から青磁皿と壺が各1個出土している。人骨は残ってないものの、完形の遺物が出土していることから

土壙墓の可能性がある。

出土遺物は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁などが出土しているが、大半は細片である。**114**・**115**は土師器の小皿。**114**は復元口径8.2cm、器高1.2cmを測る。底部糸切りで板状圧痕が残る。**115**は口径9.6cm、器高2.3cmを測る。底部ヘラ切りで板状圧痕が残る。**116**は須恵質に近い鉢で口径27.0cmを測る。口縁から体部内外面の調整はヨコナデ。粗い作りである。**117**は白磁碗底部。底径6.1cmを測る。体部から内底には光沢のある灰白色釉がかかるが、高台部は露胎。**118**・**119**は青磁。**118**は龍泉窯系青磁皿Ⅰ-2類。完形で口径11.6cm、器高2.5cmを測る。見込みに片切彫りの双魚文を施す。オリーブ灰釉が厚めにかかり、外底は釉を掻き取り、灰黄褐を呈す。**119**は越州窯系青磁壺。ほぼ完存で口縁を少し欠く。口径5.0cm、器高15.9cmを測る。底部は高台がつく。外面から頸部内面迄鈍い黄色釉がかかるが、部分的に剥げている。肩部に波状の線彫り文様が入る。以上の遺物から遺構は12世紀後半頃と考える。

④　ピット出土遺物（Fig.16）

120はSP05出土の土師器坏。小片で復元口径13.2cmを測る。底部糸切り。**121**はSP08出土の白磁皿Ⅲ-1類の底部で高台径4.8cmを測る。内面見込み釉の掻き取り。高台内には花押と思われる墨書がある。**122**・**123**はSP11出土の瓦器。**122**は皿で口径10.2cm、器高1.8cmを測る。底部は糸切り、体部外面はヨコヘラミガキ。**123**は椀で復元口径17.0cm、器高6.2cmを測る。体部から口縁部内外面はヘラミガキ、底部

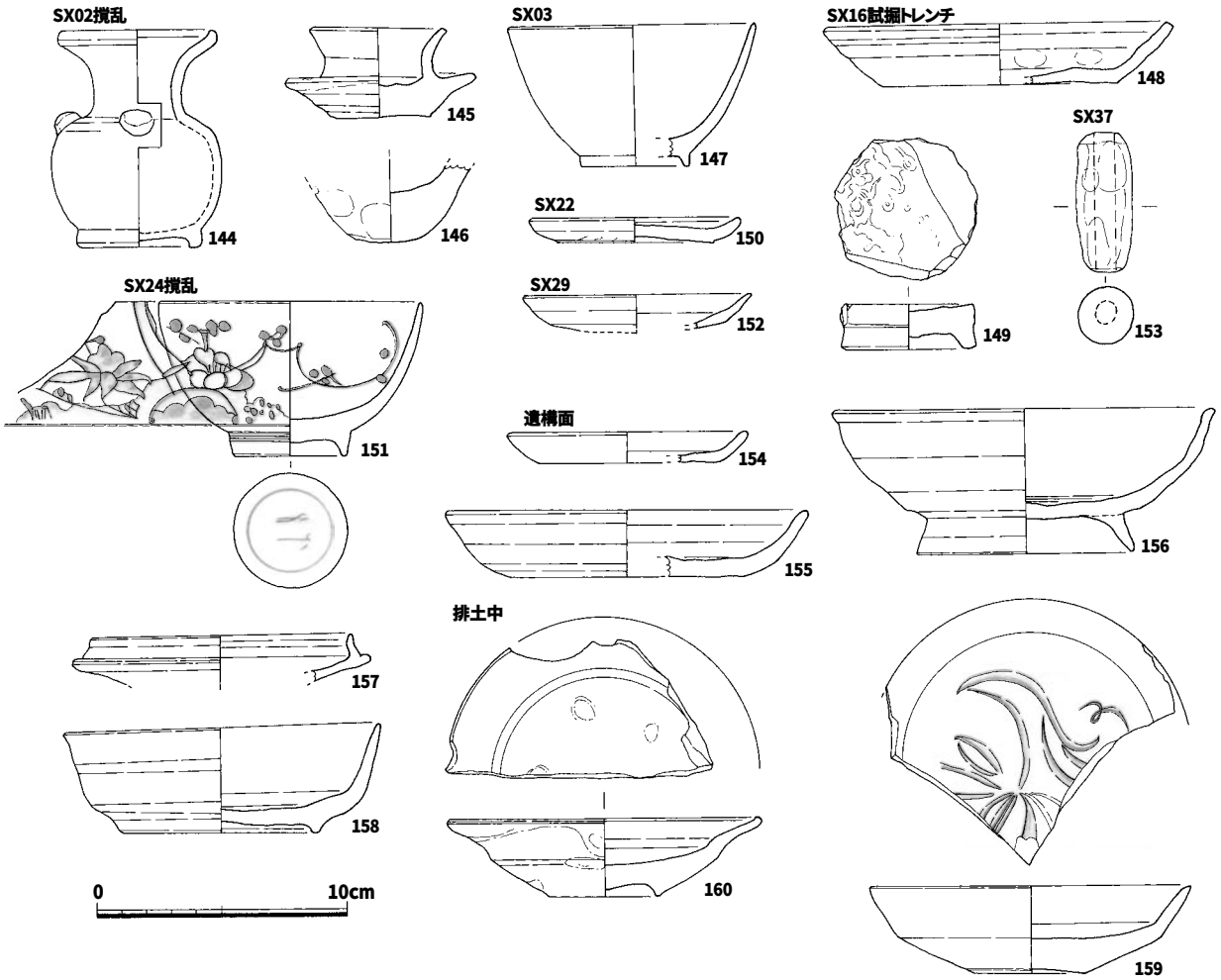


Fig.17　攪乱・遺構面出土遺物（1/3）

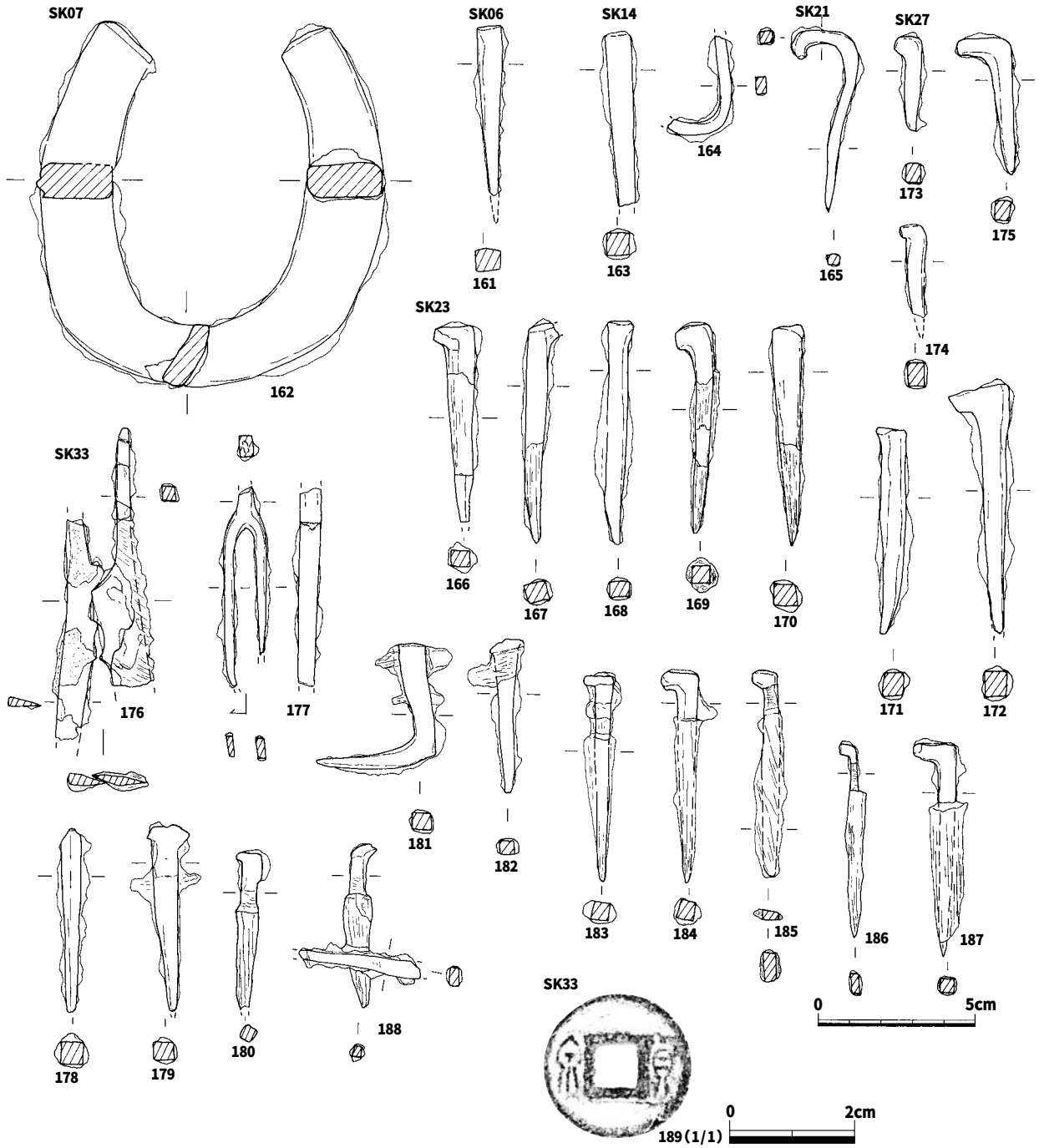


Fig.18　各遺構出土鉄製品・銅銭（1/2・1/1）

糸切りで板状圧痕が残る。**124**はSP18出土の土師器椀底部で復元底径6.8cmを測る。**125**はSP22出土の土師器小皿で復元口径10.8cm、器高1.5cm以上を測る。**126**はSP39出土。土師器の甕口縁部で復元口径16.4cmを測る。調整はヨコナデ。色調は赤みを帯び二次的加熱を受けている。**127**・**128**はSP47出土の土師器。**127**は小皿で復元口径9.3cm、器高1.3cmを測る。底部糸切り。**128**は瓦器椀底部で復元底径6.0cmを測る。13世紀前半頃のものか。**129**はSP53出土の土師器の坏。口径15.6cm、器高3.1cmを測る。底部糸切りで板状圧痕が残る。12世紀後半頃のものか。**130**はSP61出土の完形の土師器坏。口径15.4cm、器高2.8cmを測る。底部は糸切り。12世紀後半代。**131**はSP63出土の土師器坏で復元底径14.6cm、器高2.8cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕が残る。**132**はSP77出土の土師器の小皿。復元口径8.2cm、器高1.0cmを測る。

底部は糸切り。**133**はSP82出土の土師器椀。体部から内面は丁寧なヘラミガキで、高台部はヨコナデ。内面は黒変する。**134**～**138**はSP90出土。**134**は土師器の托で復元口径11.5cm、器高2.3cmを測る。**135**～**137**は白磁。**135**は碗口縁部細片。口縁部は僅かに玉縁状を呈し、内面は沈線が巡る。外面体部下半は露胎。**136**は皿III-2類口縁部で復元口径13.8cmを測る。内面沈線が巡り、口唇部には砂が付着する。**137**は青白磁壺胴部片。内外面青みがかった灰白色釉がかかり、表面には氷裂が入る。**138**は鉢IV-1類の口縁部片。復元口径25.4cmを測る。内外面に黒褐色釉がかかるが、白っぽく発色する部分がある。胎土は暗灰褐色で精良。13世紀代のもの。**139**はSP99出土。白磁碗底部片で底径5.9cmを測る。外底部はケズリで露胎、畳付は擦り。内面は浅黄色釉がかかり、細い沈線が入る。**140**はSP16出土の礎石。長さ27.7cm、幅22.5cm、厚さ6～6.6cmを測る。上下両面敲打調整後擦っている。石材は玄武岩。**141**はSP34出土の石球。径4.3cmを測る。全面丁寧な敲打調整。灰オリーブ色を呈し、石材は砂岩系か。**142**はSP68出土の滑石製の瓦玉か。一辺2.5cm、厚さ1.7cmを測る。各面ミガキ仕上げ。石鍋片を再利用したもの。**143**はSP53出土の石錘と思われる滑石製品。方形を呈し、縦長3.5cm、横幅2.6cm、最大高3.1cmを測る。中央に0.7cmの紐通し孔がある。各面丁寧なミガキ調整。

⑤　遺構面・その他の遺構出土遺物（Fig.17、Ph.24・26）

144～**153**は各攪乱土坑出土。**144**は口縁部を一部欠く陶器の仏花瓶。復元口径6.0cm、器高8.7cmを測る。緑がかった灰白色釉が厚めにかかる。**145**は完形の陶器のひょうそく。口径5.4cm、器高3.8cmを測る。暗赤褐色釉が受け皿部までかかる。18世紀のもの。**146**は土器の蛸壺底部。外面ナデで、内面は指押え仕上げ。**147**は陶器碗で復元口径10.0cm、器高5.6cmを測る。畳付以外浅黄色釉がかかる。**148**は土師器坏で復元口径14.0cm、器高2.4cmを測る。底部は糸切り。**149**は青白磁器の底部片を利用した瓦玉。直径5.7cmを測る。**150**は土師器小皿で復元口径8.4cm、器高1.0cmを測る。底部糸切りで、板状圧痕が残る。**151**は肥前磁器碗で口径10.6cm、器高6.1cmを測る。18世紀前半のもの。**152**は土師器小皿で復元口径9.2cmを測る。**153**は土師質の管状土錘。長さ5.6cm、最大径2.3cm、孔径0.8cmを測る。丁寧なナデ仕上げ。

154～**156**は遺構面出土の土師器。**154**は小皿で復元口径9.6cm、器高1.3cmを測る。底部は糸切り。**155**は坏で復元口径14.6cm、器高2.7cmを測る。底部糸切り。**156**は椀で口径15.2cm、器高5.7cmを測る。調整は回転ナデ、高台内はナデ。11世紀後半のもの。

157・**158**は遺構面下で検出した遺物。**157**・**158**はいずれも須恵器。**157**は坏身で復元口径10.4cmを測る。小田富士雄氏編年のIVb期のもの。**158**は口縁部を部分的に欠く坏。歪みがあるが口径12.7cm、器高4.4cmを測る。8世紀前半～中頃のもの。

159は西壁出土。龍泉窯系青磁皿Ⅰ-1a類。復元口径12.8cm、器高3.5cmを測る。見込みにヘラで片切彫り花文を施す。厚めの緑灰色釉をかけるが、底部は釉を剥ぐ。**160**は唐津系の輪花陶器皿で復元口径12.6cm、器高3.1cmを測る。高台は兜巾状にケズリ出す。外底部以外には灰オリーブ釉がかかる。見込みに胎土目痕が残る。16世紀末～17世紀初めのもの。

3．まとめ

南側で調査した第10次調査の成果を参考にして今回の調査のまとめとする。

検出遺構の時期は大きく2時期に分かれる。第1期は12世紀後半～13世紀で、土坑や墓がある。第10次調査区でもこの時期のものが多い。ただ異なることは、第10次では井戸の検出が多いが、今回の調査で

は井戸がなく、代りに墓がある。これは土地の利用形態の差であろうか。第2期は近世にかかる時期で、SD04やSD11、SK07などがある。溝は現在の筥崎宮の町割方向にほぼ沿う。第10次調査では15～16世紀の東西溝が検出されており、これらは筥崎宮周辺の町割に沿う溝であり、今回調査のSD10は第10次の溝に並行、SD04は直交する。建物も柱方向からこの時期であろう。12世紀は墓所として利用されていたが、中世後期になって筥崎宮周辺の町場として利用されていくのであろう。

SK38の埋土から採取した貝類を分類検討した結果、食料残滓でなく、自然の状態の貝で内湾内砂浜に打ち上げられた貝類溜まりのものが採集されたものではないかという事である。本調査区の東側は多々良川の河口に内湾状に海が大きく入り込みラグーンを呈している。調査区北半、SD10から北側には、SK38以外の遺構にも貝殻を含む土が入っているので、箱崎遺跡東側の内湾ラグーン部から取ってきた土で整地している可能性がある。

中世以前については第10次では古墳時代中期の遺物が出土しているが、本調査区では6世紀末頃のものが最古である。

４．付論　箱崎遺跡第59次調査区出土の貝類について

文化財部専門調査員　山崎　純男

箱崎遺跡第59次調査区、SK38の混土貝層を水洗いして得られた貝類である。それぞれ4個のポリ袋に入れられていた。便宜上、それぞれに1～4の番号を付して個別に分析した。重量は1が335g、2が145g、3が296g、4が199gである。分析にあたって、斧足綱については殻頂部から主歯部分が遺存する個体を対象として左右殻に分類して、数の多い方を個体数として示した。袋によって若干異なるが、種が同定出きたのは腹足綱がツボミガイ、キサゴ、スガイ、ヘナタリ、ウミニナ、ツメタガイ、アカニシ、ハナムシロガイ、ムシロガイ、バイ、テングニシの11種、斧足綱がサルボウガイ、イタヤガイ、マガキ、ヤマトシジミ、アサリ、カガミガイ、ハマグリ、シオフキガイの8種の計19種である。なお、ウミニナについてはホソウミニナ、イボウミニナも含まれるが一括した。またイタヤガイについては殻頂部が存在しないため個体数は出ていない。

これらの貝種で主体を占めるのは、キサゴ、ウミニナ、ムシロガイ、アサリである。袋ごとに個体数と構成比を見ると、キサゴは1が280個体、47.70%、2が164個体、61.42%、3が262個体、49.90%、4が85個体、31.60%である。ウミニナは1が141個体、24.02%、2が59個体、22.10%、3が199個体、37.90%、4が148個体、55.02%である。ムシロガイは1が48個体、8.18%、2が20個体、7.49%、3が24個体、4.57%、4が15個体、5.58%である。アサリは1が83個体、14.14%、2が12個体、4.49%、3が15個体、2.86%、4が9個体、3.35%である。袋ごとに若干の差違があるが傾向は一致している。全体的には腹足綱が大半を占め、1が83.64%、2が94.36%、3が95.79%、4が95.18%である。

ここで注意されるのがこれらの貝が食料として不適であることである。ウミニナ、アサリは現在でも食料として利用されるが、この中のアサリは殻高が0.5～2.8㎝で、大部分は殻高1㎝未満の稚貝であり、中にはツメタガイによる穿孔が見られる貝殻4点も含まれている。明らかに死貝である。またアカニシ、バイ、テングニシ等の巻貝も稚貝である。サルボウガイ、ツメタガイ、シオフキガイは大きさから食料としても良いが、その数は極めて少ない。以上からこれらの貝類は食料として持ち込まれたものではないと判断出来る。これらの貝類はその構成からみて、内湾の砂浜に打ち上げられた貝類溜まりのものが採集されたと考えることが出来よう。何のために遺跡に持ち込まれたものか判断できないが、今後さらに検討が必要であろう。

箱崎遺跡第59次調査SK38出土貝類構成比表

	貝　種	殻	フタ	個体数	構成比	殻	フタ	個体数	構成比	殻	フタ	個体数	構成比	殻	フタ	個体数	構成比
腹足綱	ツボミガイ					1		1	0.37								
	キサゴ	280		280	47.70	164		164	61.42	262		262	49.90	85		85	31.60
	スガイ	10	3	10	1.70	1		1	0.37	8	1	8	1.52	3	1	3	1.12
	ヘナタリ	1		1	0.17	2		2	0.75	7		7	1.33	4		4	1.49
	ウミニナ	141		141	24.02	59		59	22.10	199		199	37.90	148		148	55.02
	ツメタガイ	3		3	0.51	3		3	1.12	2		2	0.38				
	アカニシ	1		1	0.17					1		1	0.19				
	ハナムシロガイ	4		4	0.68	1		1	0.37								
	ムシロガイ	48		48	8.18	20		20	7.49	24		24	4.57	15		15	5.58
	バイ					1		1	0.37					1		1	0.37
	テングニシ	3		3	0.51												
	小　計			491	83.64			252	94.36			503	95.79			256	95.18
	貝　種	左殻	右殻	個体数	構成比	左殻	右殻	個体数	構成比	左殻	右殻	個体数	構成比	左殻	右殻	個体数	構成比
斧足綱	サルボウガイ	4	1	4	0.68	1		1	0.37	1	1	1	0.19		1	1	0.37
	イタヤガイ																
	マガキ	4	4	4	0.68					4	3	4	0.76				
	ヤマトシジミ					1		1	0.37								
	アサリ	83	68	83	14.14	6	12	12	4.49	11	15	15	2.86	9	9	9	3.35
	カガミガイ										1	1	0.19				
	ハマグリ		2	2	0.34												
	シオフキガイ		3	3	0.51		1	1	0.37	1	1	1	0.19	3	3	3	1.12
	小　計			96	16.35			15	5.60			22	4.19			13	4.84
	計			587	99.99			267	99.96			525	99.98			269	100.02

Ph.1　調査区周辺の状況（南から九大方面を臨む）

Ph.2　調査区南側（東から）

Ph.3　調査区中央部（東から）

Ph.4　調査区北側（東から）

Ph.5　SB45建物（東から）

Ph.6　建物西壁土層の状況（東から）

Ph.7　SD04（南西から）

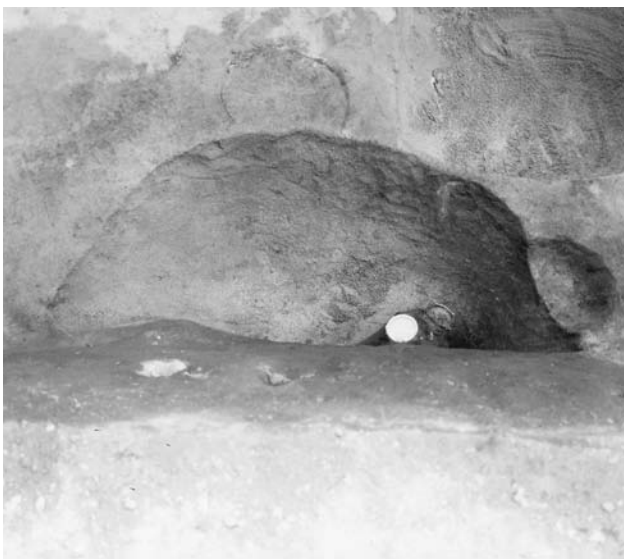
Ph.8　SD10完掘状況（東から）

Ph.9　SK07（西から）

Ph.10　SK07底面の状況

Ph.11　SK06（北西から）

Ph.12　SK14（北東から）



Ph.13　SK20（西から）

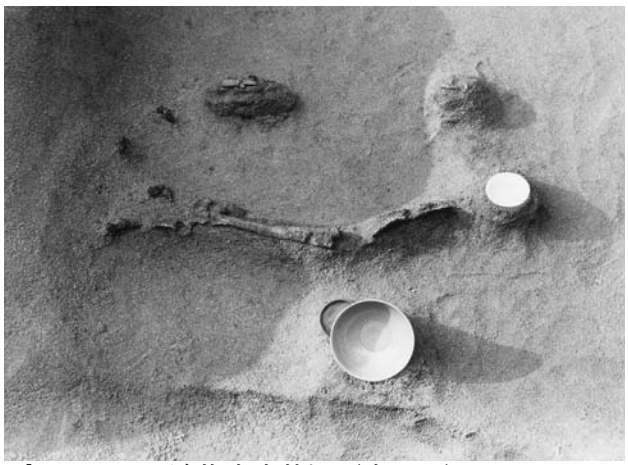
Ph.14　SK21（西から）

Ph.15　SK23・33検出状況（東から）

Ph.16　SK23（西から）

Ph.17　SK23遺物出土状況

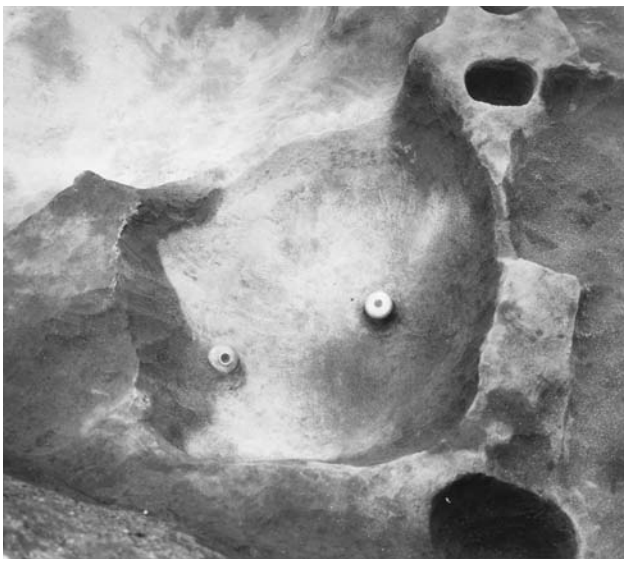
Ph.18　SK33（東から）



Ph.19　SK33遺物出土状況（東から）

Ph.20　SK30（北西から）

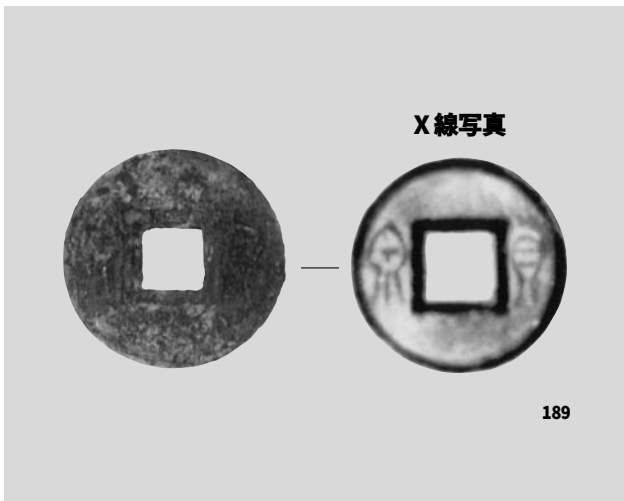
Ph.21　SK38（南西から）



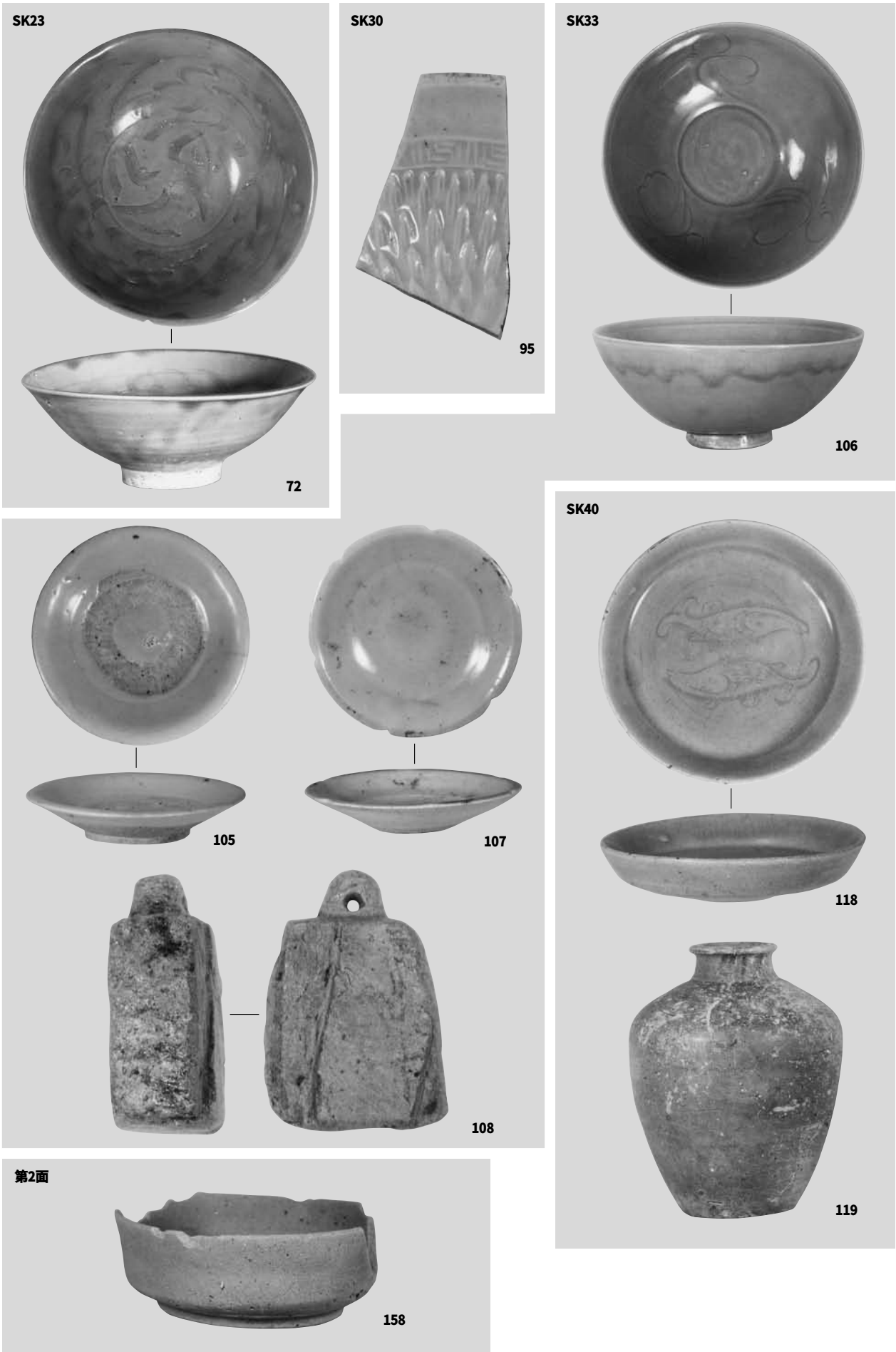
Ph.22　SK40（北西から）

Ph.23　SK40遺物出土状況

Ph.24　第2面遺物出土状況



Ph.25　SK33出土貨泉



Ph.26　各遺構出土遺物　**（縮尺不統一）**

報告書抄録

ふりがな	はこざき
書名	箱崎38
副書名	－箱崎遺跡第59次調査報告－
巻次	38
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1048
編著者名	山崎龍雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621福岡市中央区天神1丁目8－1　TEL092－711－4667
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
はこざきいせき 箱崎遺跡 だいごじゅうくじちょうさ 第59次調査	ふくおかしひがしくはこざきさんちょうめ 福岡市東区箱崎3丁目 にせんよんひゃくじゅうにのいちばん 2412-1番	40130	2639	33° 37′ 13″	130° 25′ 29″	20071105～20071215	156.4	専用住宅兼共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡 第59次調査	集落	中世、近世	中世－溝＋木棺墓＋土坑＋柱穴/近世－土坑	古代－須恵器/中世－土師器＋瓦器＋中国産陶磁器＋滑石製品＋中国銭＋鉄製品/近世－国産陶磁器	木棺墓に貨泉が１枚副葬

要約	調査区は箱崎遺跡の北側に位置する。検出した遺構の時期は中世から近世にかけてである。古代の遺物も僅かに含むが、明確な遺構は確認出来なかった。中世は12世紀～13世紀の遺構が多い。今回は墓を3基検出した。木棺墓と土壙墓で、いずれも中国産輸入陶磁器を副葬していた。特にSK33は人骨の一部が残っていた。この墓からは副葬品で鉄製の簪や鋏が出土しており、被葬者は女性の可能性が高い。また中国新王朝の貨泉も1点出土している。後世に持ち込まれたものであろうが、当遺跡では初めての出土である。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1048集

箱崎38

― 箱崎遺跡第59次調査報告 ―

平成21年3月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号

印刷　石橋印刷株式会社
福岡市博多区東比恵３丁目21番10号
TEL(092)411-0544